
兜乗りは終らない

さわだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帚乗りは終らない

【NZコード】

N3320D

【作者名】

さわだ

【あらすじ】

「帚乗り」とは、高度な魔術でカスタマイズを施した帚にまたがり、高速でシユバルツバルト（黒い森）を駆け抜けるレース。誰よりも早く森を駆けることは魔女にとって最高の栄誉なのだ。北欧の魔女学校を舞台に、東洋から来た主人公チカは、退屈な学校生活の中で唯一熱くなれる「帚乗り」にのめりこんでいくのだった……。

プロローグ

私の学校では入学すると、沢山の魔術書と一緒に一本の兜を渡される。

「奉仕の精神」を養うためにと言う事だが、誰もが兜をもつて外に出て積極的に奉仕活動しようとは思わない。

しかし、誰が思い付いたのか分からぬが、この面白くも無い兜を最高に楽しいモノに変えてしまつ方法を作り出した。

それが「**兜乗り**」。

黒く学校の周りを、いやこの世の全てを覆い尽くすような深い森。通称「シユバルツヴァルト（黒い森）」を誰が兜に乗つて一番早く抜けられるかを競うのだ。

太陽が赤く輝く暖かい日本から、血筋のものと言う理由だけで連れてこられたこの北欧にある学校は不満だらけだったが、この「**兜乗り**」だけは私の心をいたく刺激した。

日に日にスピードにのめり込む私を、周りの人間は呆れるふりをして軽蔑するが、そんな事はどうでも良い。どうせ私は最初から異邦人だから、周りの同級生とは考えが合わないのだ。そう割り切ると頭が冴えて、兜で森を飛ぶのが楽しくなった。

鳥よりも速く森を駆け抜けるのはとても緊張する。上手く木を避けようとして別の木にぶつかりそうになる事はショッシャウだし、その時バランスを崩すとそのまま帚から無様に落っこちることもある。体の回りに空氣の壁を何層も重ねて体を守っているにしても、痛い物は痛い。

切り傷や打撲を作つて帰つてくる時は、偉く惨めだが何だか次こそはと復讐心を喚起され、また飛んでは落ちてを繰り返す。

毎日増える傷や包帯を、同じクラスの人間がクスクスと笑うの私は知つている。けど今はつまらない勉強よりもずっと第で遊んでいた方が楽しい。夜中宿舎を抜け出して、監視の目を潜りながら帚に乗つて飛ぶことは、お菓子を作りあうよりも私には大事だ。

そんなある日、夜疲れて昼間の休憩時間に校舎の外の木陰で寝ていると、植え込みの前のベンチで同じクラスの数人にお茶を飲みながら何やら話しこみでいた。聞くつもりは無かったが、聞こえてきたのは自分の事だったので耳だけは音の方へと傾けた。

「あのチカつて子は相当変わつているわよね

「そうそう、両腕にこれでもかつてぐらぐら包帯巻いちゃつて

「ミーラよねあれじやあ

まさか自分が死体よばりされているとは思わなかつた。黙つて聞いていたら私が一番大事にしていることを貶けなし始めた。

「そんな傷ばつか作つて何やつてんのあの子？」

「アレじゅない、帰乗りよ」

「そんな子供っぽい」とやつていいの。最初見た時は飛び級の生徒かと思つたけど、やっぱり中身も外見も子供なんじゃないの」

「東洋の子はやっぱ変わっているわ」

「そう、行動全部が全部子供っぽいよね」

ケラケラと笑う彼女たちの前に自然と私の腰は跳ね上がった。植え込みを超えて校舎に戻る時、チラッとベンチを見ると三人が肩を寄せて気まずそうに上目遣いだった。

私が何も言わずにその場を立ち去りたとすると、真ん中の女の子が声を出す。

「ダルグリッシュさん待ちなさいよ」

振り向くと、私より身長の高い彼女は見下ろしながらひびき声を出した。

「貴方、帰で「世界の夜明け」でも見に行くつもりなの？」

真ん中の茶色い髪を短く切り揃えた彼女は横の一人に目配りして笑い始めた。

「なにそれ？」

私にはその時質問の意味が分からなかつた。

「貴方、そんな事も知らないで帰に乗つていいの？」

「悪い？」

「悪くはないけど……やっぱり変わっているわよ貴方」

態とらしく驚きながら、また三人で笑い出したので私は寝不足と不愉快さから来ているであろう怒りに身を任せて一步前に踏み出そうとしたが。その時グイッと肩を掴まれてバランスを崩して後ろの肩を掴んだ人物に寄りかかった。

「穏やかじやないなあ」

「フアナ先輩」

途端に目の前の三人は黄色い声を上げた。

軽く手を挙げてその声に応えると、フアナ先輩と呼ばれた彼女は私の肩を掴んで自分の方へと向けた。私は玩具の様にくぐりと周った。

黒い髪の、少し浅黒い健康的な肌の女の子は前のクラスメイトよりも長身だった。何よりも特徴なのは大きな目。見詰めると吸い込まれそうな黒い瞳に驚いた。

「凄い傷だねあんた」

「別にたいしたこと無いです」

予想通りの答えだと白い健康的な歯を見せ付けられて私が失敗を悟つた時、目の前に有る一枚の綺麗な羽根に目を奪われた。それは太陽の光に反射すると様々に色を変え、美しく輝いていた。

羽根に目を奪われていると、ファナ先輩はやつと私の肩に乗つかつた手を放した。

「あんたも「世界の夜明け」を見るために頑張つてるのか？」

また出てきたその「世界の夜明け」と言ひ言葉に私は戸惑つた。

「先輩、その子「世界の夜明け」を知らないんですよ」

先輩と私の間に入つて、クラスメイトは尊敬の眼差しをファナに向けた。

「へえ、それでそんだけ傷を作るとは根性座つているねえ」

品定めをするように私を見た後で、感心してながら私の顔を覗き込むと、隣のクラスメイトは少しムッとしていた。

「可笑しいですよね、学校に入つて「世界の夜明け」の話を知らないなんて」

「そうでもないさ、あたしもどんなモノかよく聞かなかつたからなあ

あ

私の目の前勝手に進む話に興味は無かつたが、その綺麗な羽根には興味があつた。

「それでも、一度は見てみるもんだねアレは」

先輩の話しに間に入つてきた彼女とその取り巻きの一人もうつとり

としながら先輩の顔を見ていて何だか私には不気味に見えた。

「けど先輩みたいに、銀フクロウの羽根を身につけられたら素敵ですね。」

「それは銀フクロウって鳥の羽なの？」

「ダルグリッシュさんは本当に何も知らないのね」

冷やかすように彼女は先輩にすり寄つて、羽根を指して喋り始めた。
「Jの銀フクロウの羽根は「世界の夜明け」を見た人だけが手に入
れられる証拠なのよ」

「証拠？」

「そう、「世界の夜明け」を見た人だけに訪れる銀フクロウから授
けられる優れた魔法使いの証明の証よ」

他人の服を指さしながら誇らしく語る彼女に私は益々不快な気分になつたが、銀フクロウの羽根には興味を引かれた。

「いや、実際は目の前に止まつてたんで、一枚拝借したんだけどね」

先輩は美談に注釈を入れたが、そんなことは彼女たちには関係なか
つた。

「まあ「竜の巣」の先にある「千の泉」を目指すのは価値があるさ

」「竜の巣」？」

また質問と露骨に隣のクラスメイトは嫌な顔をしたが、先輩は何処か嬉しそうに私の肩を叩いた。

「「」の森にある凄くヤバイ所さ」

「竜が生きているって話は本当なんですか先輩」

私はその時露骨に顔をしかめた。竜が生きている?

「「」の前「竜の巣から」喚きながら帰つてきたヤツが居たらしいな

「ええ、別のクラスの子なんですけど見たつて言つんですよ竜を」

「あたしもチラッと見たさ、赤くて大きな口をな!」

その話を振られた時、ファンという先輩は手を大きく広げて二人の前で戯けて見せた。また上がった黄色い声援に私は閉口した。

「どうだいあんた面白そつだろ?」

「別に……」

「ただ帚に乗つて木の間を擦り抜けるだけよりも、遙かに大変な困難が「世界の夜明け」前には待つている」

ヤケに目を輝かせながら、初対面の先輩は私を挑発した。

「けど挑戦しがいは凄くある」

「挑戦？」

私は帚に乗つて空を飛ぶことが、試験の様なモノとどうして繋がるのかピントは来なかつた。

「そり、そしてその挑戦に勝つと。証拠としてこれがもれなくこれが貰えるつて訳さ。シンプルで素敵だろ？？」

その時先輩の細くて綺麗な指が指した羽根を見た時、私は何か心に火が灯つた様な気がした。一瞬見た先輩の目はその私に灯つた火を見逃さずに、さあ始めると合図を送つたようにも見えた。

そして私の体はその火を消さないよに忙しなく動き始める。私は直ぐに学校の図書館へと歩き始めていた。

まずは学校周辺の詳細な地図を手に入れなきやと私は直ぐに行動を開始した。

足早に歩く私をクラスメイトは嘲笑で送り出しだが、先輩だけは違つた。

「竜の巣へ飛び込むときは最初で最後だと思ひな。「世界の夜明け」を誰よりも速く見るコツは一発勝負に賭けることや」

背の高い先輩だけは、その場を走り去ろうとした私の背中へ大きな声を掛けた。私は何処までも先輩に全てを見透かされた気分になりながらも、目標が出来たことに興奮を覚え、足早にその場を後についた。

この学校では誰もがその銀フクロウの羽根を見ると敬意を払いその

持ち主に一目置く。

顔立ちや肌の色よりも目立つ証を私は手に入れたいと願った。強く、暗い森を睨み付けその先にある「証拠」が欲しかった。それさえ有れば誰もが私に距離を置く。それがこの学校に入つてから一番欲しかったものだ。

その日から私は一人で自室にこもり、前よりも速く飛ぶ方法の研究に没頭していく。

そして、運命の週末を私は迎えた。

ピット・ワーク

簡素なベッドと机が一つずつ有る小さな部屋で、少女は板張りの床に腰を降ろしていた。そして、本を片手に大きな外掃き用の藁と木の棒で作られた質素な帚を睨むように見つめている。質素な素材で作られた長袖のワンピース姿のまま胡座をかいて、頸に手を当てた後神経質そうに黒い髪を搔きむしめた。真っ直ぐ腰まで伸びた髪が小さく揺れると、東洋系の細身の顔には困惑の表情が浮かぶ。

(違う、違う、スピード上げたいなら質量軽減法を施した方が良いけど……)

腕を組み、小さな頭を前屈みにして唸る。

(そうすると、肝心の推進出力上げる術を埋め込む場所が削られて意味がないなあ)

左手の手元に散らばったメモを取り、足下に転がったペンを取る。

(ああ、自動回避術を削れば質量軽減法と推進出力増大法が乗つかるんだけどなあ。けどこれ削っちゃうと気にぶつかって、下手すれば死んじやう可能性大)

物騒な思考を抱え込んだ頭の重さに耐えかねて、少女は体を床にそのまま倒した。

(そもそも帚にこれだけ術式を施さなきゃいけないとひたすら無理があるのよ)

頭を床にくつつけても、思考は零れることなく頭を満たす。堅い板張りの床にそのまま頭を着けていると、板を踏む音が聞こえた。程なくドアをノックする音がする。

二度、三度と叩いても床に横になつた少女は微動だにしない。それは、ノックした人間にに対する拒絶のメッセージだ。

またかと心の中で悪態を付いても、それを口にする気力はもう無い。帚に対し思考能力の大半を使い果たしたので、簡単な「ミユニケーションすらめんどくさい。

程なく鍵の掛かっていないドアノブを捻る音が聞こえる。

ドアの隙間から顔を出したのは同じ年頃の少女だった。その少女は羊皮紙の様な白い肌と、青い目に大きな眼鏡をかけていた。薄い金

髪を長い三つ編みにして、を揺らして部屋を覗き込むその表情は、何処か落ち着きを感じさせ心配する母親のようだ。

床に横たわる少女のギリギリとした真剣な顔つきとは対照的だった。

「起きているの？」

「起きている」

倒れ込んでいる少女はぶつかりぼつに応えると、顔を合わせたくないのか床に額を付けて伏せる。

「晩ご飯の時食堂で見かけなかつたけどどうしたの？」

「別に、食べなくなつたから」

やつぱりとこいつ顔をして、覗き込んだ少女は溜息を吐く。

「駄目よ食べなきや」

「一食抜いた位どうつて事ない」

「これからまた帚に乗るのに？」

伏せていた少女は初めてドアへ目を向ける。視線にはそれがどうしたという挑発が込められていた。

「チカ、危ないことにはしないで」

懇願する少女にチカは上体を起こし上田使いで応える。

「じゃあ私もお願ひするわアリル、私の事はほつといじ

胡座の上に膝を付いたチカは不遜そのものだった。それをアリルは嫌な顔一つせず、会話を続ける。

「ほつておけば席に乗らない?」

「あわか

アリルはまた溜息を吐いて部屋に入った。そのドアに隠れていた手には小さな紙袋が合つた。そのまま部屋の窓側にある机により、袋を開けて中身を取り出す。パンとパンの間に野菜やベーコンを沢山挟んだサンドイッチが出てきた。

「こまお茶入れてくるから、ちょっと待つていてね

「余計なことしないでつて言つたじゃない・・・」

わざわざお湯を沸かしに行つたアリルを尻目に、チカは立ち上がりベットに体を横たえた。沈み込んだ体を重そうに動かしてうつ伏せになる。

(畳の上の布団が懐かしいな・・・)

柔らかいベットが今のチカには酷く不愉快だった。

チカは机の椅子に座り、左手に持つたサンドを敵かたきのように強くかぶりつぶ。右には先程見ていたメモの束がある。

(お腹空いてたんだ)

豪快に食すチカを見て、アリルは微笑んだ。それに気付いたチカはアリルを一瞥した後、サンドを放してマグカップを手に取り口にアリルが煎れた紅茶を流し込む。チカは紅茶に砂糖やミルクを入れない。

アリルは最初にチカと合った時の事を思い出した。

「砂糖は幾つ入れる、ミルクは?」

「いらない」

「ホントに?」

不思議そうに顔を見るアリルに、チカは不服を唱えた。

「私の国ではお茶には何も入れない」

今日もさつきまで床に胡座をかけて、メモと睨めっこをしていた。床に腰を落とす国から来た異邦人を、アリルは何だか気になつて何時も声を掛けていた。まるつきり違う環境に飛び込んだチカを、アリルは何かと面倒を見た。

それはクラス委員長としての使命と言つよりは、頑なにクラスに溶け込むことを拒絶する彼女が本心から心配になつたからだ。アリルはクラスメイトが困つているのを放つておけるタイプの人間では無かつた。だからクラス委員長という面倒な仕事を引き受ける事になつた。そして、自然にチカに何かと声を掛けることになつた。

周りは所詮言葉が通じないのだと呟つたが、チカの英語は完璧なクイーンズ・イングリッシュだった。少なくとも言葉は通じているはずだ。

遠く極東からこの深い森に囲まれた「魔法学校」に来たチカは、皆の興味を惹く対象だったが、頑なに会話を拒む彼女を今では誰もが距離を置くようになっていた。

そんな彼女だからこの小さな個室が「与えられている。

「フュアリラント魔法学校」は全寮制で共同生活を基盤に運営している。個室が与えられるのはホームシックに掛かった者や、本人の強い希望が無ければ入れない。そう、チカの場合は本人の強い希望だ。友達を作らず、誰とも一歩も一歩も距離を置く。

アリルはそれでは五年に及ぶ学校生活が、何も楽しくないものになってしまふと心から心配していた。しかし、その善意がチカには煩わしかつた。

それでもしつこく部屋を訪ねてくるアリルにチカは根負けして部屋に鍵を掛けるのを止めた。ノックに応えるまでずっとドアを叩き続けるアリルに強い拒絕の言葉を投げつけても、アリルは全く堪えなかつたからだ。

部屋に入れるようになるまでの苦労を少し思い出しながら、ミルクと砂糖をたっぷり入れた紅茶を飲む。アリルは部屋に横たわる帚を見た。

何處にでもある普通の外掃き用の帚。この「魔法学校」に入学した時渡される帚はある意味彼女たち魔女と呼ばれるものの象徴でもある。

る。

この学校がある大陸で広く伝わる童話には、魔女達は帚に乗つて空を自由に飛んでいる。それは昔から有る風景で、不思議でもなんでも無い。

ただ鉄の機械が燃焼工学と航空力学、さらに魔法素材^{マジックマテリアル}の発達により自由に都市と都市を結んでいる現在はあまり魔法で飛翔し様とするものはいない。その飛行術は廃れ、より便利な方を人は選んだ。

しかし、その飛行術はこの「魔法学校」には確りと受け継がれていた。と言うのも学校の回りは未開の深い森で覆われており、その場所は一般にはあまり知られていない。観光パンフレットに載るような所でもない。

立派な校舎があるが娯楽が少ないので遺憾ともしがたいが、隣の街まで数百キロメートルに渡つて深い森が続いているのだ。校舎を抜け出してどこかへ遊びに行くのも簡単にはいかない。

そこで、誰が考えたかは定かではないが、空を飛んで移動する方法を思いついた。そう、一番手に入りやすい材料で移動手段を作ることを考え出したのだ。

元々魔法のセンスがすば抜けている在校生達はたちまち古の飛行術を誰もが使えるようライブラリーを作り、クラス単位で共有した。それが、先輩から後輩へと受け継がれ今にいたっている。

そのライブラリーを流用して、様々なカスタマイズを施し自分の「飛行用帚」を作るのが一部の人間には趣味として今も昔も流行っている。

アリルが床に転がってる昴に手をかざす。

「オペレート（作動）」

アリルが呟くと、昴が意思を持つて床から腰の高さまで浮かんだ。昴に掛けられた「魔術」がアリル指示に反応して「魔法」を発動させた。

その浮かんだ昴に手を翳しながら、アリルはしきりに頷いた。

「よくカスタマイズしてあるわね」の昴

施された「魔術」を眺めながらアリルはしきりに感心した。

「まだ全然だめ」

またやうでも無む邪じよ、チカは食事を続けた。

「よく出来てる。空中でのバランスも良むやつ……あら」

アリルの手が止まり目を細める。メガネのつるを持つて昴を凝視する。チカは食事の手を休めアリルの方を向く。

「Jリの強化構造式? こんなにピーキーで良いの?」

アリルが一つ二つ制御コマンドを発動させると、昴から送られた沢山のパラメータが同じ魔術特性を持つチカの目の前に映る。

「別にギリギリじゃないでしょ、私一人を支えるのには十分じゃな

い

マジマジと目に映った数字を見ながらチカが答えるも、アリルはまだ納得がいかない様子だった。

「けどこれだとチカが乗ると折れてしまうんじゃない？限界重量が三十五キロでは無理よ」

「三十五キロ？ 六十は確保してるでしょ？」

「それは静止重量よね。空中機動時の応力計算をしてないのチカ？」

「あつ」

「あつてチカ。こんなに自動回避アルゴリズムを弄っているのに、空中機動時の剛性を考えていなかつたら帚が折れて、空中へ放り出されてしまつわ」

木にぶつからない様に進行方向を変えたとき、急な機動変更で帚の柄に負担が掛かる。当然強化術式を施しておかないと、両手で掃く力に耐えるだけで良いはずの木の棒は簡単に折れてしまう。

「チカ、スピード上げるのに軽量化するのは分かるけど、それで怪我でもしたら危ないわ」

「そんな事は解ってる」

「解ってるんだつたら、直線スピード重視の設計はしないわ」

チカが目指す「千の泉」までは沢山の障害物が待ち受けている、其

処へ最短のルートで飛ぶには当然その上を飛んでしまえばよいのだが。この魔法学校には外部の進入を拒むために様々なトラップが仕込まれている。特にたちが悪いのは空中警戒魔法で、学校周辺を森より高く飛ぶものに対してあらゆる手段で警告し、応じない場合は警備隊が出動する仕組みになっている。

そんな物騒な仕組みを作動させることなく目的地に向かうには、森の木々の間を縫うように進まなくては行けない。その為、森の中を飛ぶ用にカスタマイズされる兜はその急激な軌道変更に耐えられるようによつに作られていなければならぬ。

チカの設計はそのセオリーを無視して、ただスピードを如何に出すかに重点を置かれたものだつた。

心配そうにチカの顔を覗き込むアリルに、チカは再び床に座り込んだ。

「ずいぶんアリルは「兜」のこと詳しいのね」

たつた一度で自分の兜の欠点を指摘され、チカは目の前の優等生を黙つて返すわけにはいかなくなつた。

「そうでもないわ」

「でも、なんかコツを知つてゐるみたい」

悔しそうな顔をするチカを見て、アリルは少し可笑しかつた。チカが悔しいなり感情をぶつけて來るのに、アリルは悪い氣はしなかつた。

「昔ね

アリルも床に腰を落とした、チカと田線の高さは同じになる。

「小さい時、良くおじいちゃんと一緒にやっていたの『弔乗り』」

「小さい時って何時?」

「パブリックスクールに入る前だから、十歳くらいの時かな」

「十歳で飛行術出来たの?」

チカは素直に驚いた。魔法が施された弔に跨れば誰もが飛べる訳ではない。その飛行を制御するのはあくまでも飛ぶ意思を持った者、つまり乗りこなすものに依存する。飛行術は様々なパラメータを感覚と経験で制御しなければ行けないので、幼い少女が出来る技ではない。

「家にはその手の文献合つたし、おじいちゃんが横でずっと見てくれたから」

「それでも凄い・・・家の文献ってアリルの家は大きな家なの?」

「そんなでもないのよ、代々『魔術の家系』っていうだけ」

アリルは少し首を振ると、チカにはアリルがこれ以上口を動かしたく無さそうに見えた。自分にもそういう経験はあるので、家のことはそれ以上口にしなかった。

そんな事より使えると言つ言葉のほうが頭の中を支配した。

「私より全然経験者なんだアリルは？」

「そんな事無いわ、私の場合は本当にただ飛ぶだけだから。」
「でも皆がやつている森の中を飛ぶ術とは比べ物にならないくらい簡単な仕組みしか知らないわ」

「けど私より飛行経験があるのは間違い無いでしょ」

「わっ、わうかしら」

惚けるアリルにチカは慌てて机にあつたメモを集めて、ペンを取りアリルに迫った。

「ねえ、フレームの設計が上手く固まらない限り何をやっても駄目なのは私も気付いていたの。他にもおかしな所があつたら全部言つて」

「そんな細かいこと急に言われても……それに消灯時間までもう少しもないわ」

時計は八時を回っていた。短い夏が終わり初冬に指しかかる季節の夜空は少し薄暗かつた。高い緯度のこの地域は日が落ちるのが遅く、日の出は二時から三時の間に登ってしまう。

「私は今日ビデしても飛びたい」

「そんな焦らなくて」

「一番だという証拠が欲しいもの、誰にも負けたくない」

アリルは今日何度目になるのか解らない溜息を付いた。

「チカ、みんなそんな証拠が無くても貴方を認めてくれるわ」

「違う、私は友達なんか欲しくない。ただ、影で悪口を言つしかな
い連中に私の本当の実力を見せ付けたいの。外見じゃなくて、私が
私である事を証明したいの」

「証明？」

「そう、東洋人であるとかそういうことよりも、誰よりも早く飛ん
だと言う方が格好いいじゃない？」

チカが真剣に昂をいじつている理由をアリルはハツキリと聞き、騙
されたような顔をしながらチカに質問した。

「すこし単純な気がするわ」

アリルのもつともな答えにチカは断言した。

「シンプルな方が私は好き、ゴタゴタ自分がどうにかできる範囲外
の事で騒がれるよりよっぽど楽しいもの」

そうか、チカは今まで異なる環境で育つた人間と一緒に暮らしたこ
とがないのだろうとアリルは気が付いた。そして、他人に自分を理
解して貰うのに、まさに単純な方法でその問題をクリアーしようと
しているのだ。

(私は誰よりも上手く「魔術」を扱える……その為の一^流の「昂乗

り」の証が欲しいのか

多分チカは其処まで考えていないだろ?とアリルは気付いていた。
そして、シンプルに目的を達成させる」の田の前の人間にさらに興味を持つた。

「何?」

「えつ?」

「人の顔を観察してるみたいだったから」

「『めんなさい』

アリルは思わず黒いチカの瞳を見詰めていた。チカの真剣な田にアリルは引き込まれたのだ。自分はチカの無謀な兆戦を止めるためにこの部屋に来たのに、彼女の真剣さに押し切られ帚の改良に手を貸したくなり始めているのを感じたのだ。自分がそんな無謀なチャレンジを手伝うことになるとはチカに言われるまで考えも付かなかつた。

そう、チカの挑戦は無謀なのだ、だからこそ真剣になれるのだろうとアリルは思った。

「チカ、でも「竜の巣」を夜明けまでに抜けるのは無理よ」

アリルは少し熱くなつた自身の心を冷ます為にも、今一度自制を促す言葉を口にした。

「やつてみなければ解らない

チカはまだ瞳に強い意志を宿す。

「私達一年生で「世界の夜明け」を見た人はまだないもの」

「だからやるんじゃない！」

誰がチカにこの話しへ吹き込んだのかと、少しアリルは疑問に思つた。

暗い森の中のさらに奥深い「竜の巣」と呼ばれる場所の先にある「千の泉」で「世界の夜明け」と呼ばれる現象が起こる事は、この学校に居る誰もが知つてゐる。

その「世界の夜明け」を見たものは、一人前の「昂乗り」と認められる。それがどんな現象化は見たものしか知らない。実際見たものは口を揃え、口には表せない世界がそこにあるといつ。それは小さな優越感から見たものはそのような事を言つのかと、アリルは常常疑惑に思つていた。

「チカ、私達の習つたことではまだ「竜の巣」を田没前に抜けるのは難しいわ」

「けど、達成した人は過去に何人も居るんでしょう？」

「どの人も多くの研究成果を残した偉大な「魔女」よ、やつぱりセンスが普通の人と違うのよ」

「そのセンスとやらが何か分かればなあ」

チカは自分の腰まで伸びた黒い髪を両手で搔きむしる。その後腕を組みアリルの前で考え込んだ。アリルはさつきから感情豊かに振舞うこの「異邦人」を楽しげに見た。こんなに熱心に語りかけてくる同年代の子は久しぶりだったと思い出した。初めて空を飛んだ時、周りの友達に、自慢げに飛んだことを喋っていた事を思い出した。

「帰乗りはね、いかに簡素に術式を帰に施すかが良い飛行を生む結果に繋がるつておじいちゃんが言つていたわ」

「簡素に？」

目を閉じたままチカは答える。アリルは何だか素直なチカがかわいくなつて、先生気取りで指を振りながらレクチャーした。

「そう、帰なんて小さな物体を「飛ばす」と言つ時点でもう他の魔術を練りこむスペースは無いから、後は自分がこの帰にどういう特性を植え付けるかを明確にするのだつて言つてた」

「明確に・・・」

「そして、帰に載せられない術は自分でカバーする。そして帰とお互いを補完しあい一体になればどんな複雑な場所も自由に空を飛ぶことが出来ると・・・」

「それだ！」

チカは大きな声を上げ、アリルに両手を広げて文字通りに飛びついた。

「さやつ、ちよつとチカどうしたの」

「そうよ、全部昴に乗つけようとするから重くなる」

興奮したチカはアリルを床に押し倒して上に乗りながら「ぶつくさ」と呟く。

「障害物を感じて、自動的に避けるなんて大きなアルゴリズムを乗つけようとするから上手く行かないんだ。そう、それは私の仕事にすればいい」

「チカ、痛い」

生まれて初めてマウントポジションを取られたアリルは、床にぶつけた頭を触りながら天井を見る。すると、腕を力強く引っ張られ上体が立つ。気が付くとアリルはチカに抱き付かれていた。

「アリル、礼を言つわ。これで、今日は「世界の夜明け」を見る事が出来る！」

「ちょっとチカ・・・痛い」

「あつゴメン」

ぱっと手を離して、チカは両手でアリルの手を掴む。

「私と昴が一体になつた飛行術を作り出せば良いんだ。いける、考えたアイデアが全て繋がつた」

「繋がつた？」

チカはアリルに自慢の玩具を紹介する子供の様に溌剌と喋り始めた。

「夜明けまでに「千の泉」までに行くのに必要な平均時速は毎時三百キロ。その為に必要な加速性能と高速安定性をもたらす飛行式はもう出来る。後はその「飛行エンジン」をどうやって帚に施すかだったんだけど、今のアリルの話で行けば感性系は無理に帚に施さなくても済むわ。それで空いたスペースに「飛行エンジン」を乗せることが出来る」

チカから一枚の紙にまとめられた魔術式を渡され、アリルはゆっくりと読んでいく。

単純ながら、細部は緻密に計算され尽くしていた。

(なる程、風を上手く導いてマナを蓄えた燃焼室へ送っている)

一通り読んでアリルはチカの顔を見つめる。するとチカは感想を聞きたいのか目を輝かせてアリルの反応を待っていた。アリルはクラスで言われているチカのあだ名を思い出した。「東の人形」それがチカのあだ名だ、東洋の表情のない紙と布で作られた人形の様だと言つことで付けられたあだ名だ。

けどそんな名前を受けられた人物とは思えないくらい、今自分の前にいる女の子は表情を感情とリンクして熱心に語りかけてくる。まるで子供だ、教室ですましていた人物と同じだなんて思えない。

くすっと笑うアリルに、チカは少し顔を俯いた。

「凄いわチカ、これなら本当に「世界の夜明け」を見られるかも知れない」

メモからアリルは顔を上げ、チカに話しかける。

「嘘は嫌よ」

「嘘じゃないわ」

「だつてさつき笑つたじやない」

横を向いたチカの顔は教室でのいつも表情だった。

「違うわ、別のこと思い出しだだけ」

「何?」

不思議そうにアリルの顔を覗き込むチカを、アリルは静止する。

「それよりもチカ、本当に今日飛びたかったらもう一度このパラメータ再計算した方が良いと思うわ

「さつきからやつている」

「フレームの再設計に時間を割くならば、推進系の再計算をした方が良い」

「けど早く・・・今日飛びたいの」

「それは分かった。良く分かった・・・」

アリルは立ち上がりスカートの裾を軽く叩いた。チカも吊られて立ち上がる。

「私はチカを止めに来たのに・・・」

自分はチカの無謀な挑戦を止めるためにこの部屋に来たのに、彼女の真剣さに押し切られたのを感じた。そう、彼女の挑戦は無謀なのだ。だからこそここまで真剣になれる。それに惹かれてしまったアリルはもう優等生を気取つて、レースを傍観出来る立場では無くなつた事を感じた。

自分に言い聞かせるように言いながら、最後の溜息を一つ吐いて再びチカの方を向く。

「止めても無駄なのが分かつた、もう止めない。けどせめてチカのデタラメなフレーム設計を私に任せてくれる？ チカにケガをして欲しくないの」

アリルの提案にチカは沈黙で応えた。

「だめ？」

不安げに顔を覗き込むアリルに、チカはどう応えて良いか判らなかつた。

自分はこの学校で友達を作らないと決めたはずだった。何かあれば国のことなどやかく聞かれ、騒ぎ立てられるのが煩わしく嫌だつた。その為に駄々を捏ねて寄宿舎の個人部屋を当ててもらつたのだ。

それなのにアリルは、この特大のお節介者は、入学以来少しも変わらず優しく声を掛けてくれる。授業と一緒にでてれば彼女が才能有る人間なのは解る。自然にリーダー的な役割を演じるアリルをチカは面白くなかった。

(けど、「帚乗り」に関してはやっぱり私よりアリルの方が才能ある)

さつきもアドバイスを求めた、それが自分の課してきた課題に反する様な気もしたが、それよりもアリルからは得られるものが多いと感じた。もう時間がないのだ自分が足踏みしている間に誰かが先に「世界の夜明け」に到達してしまったかも知れないのだ。こういうときにチカという少女は感情を押し殺して単純に損得を考えることが出来る。根は素直なのだ。

「判ったは、アリルは今まで好きなようにしてきたんだから、これからもどうぞ」自由に

それでもチカは最後に虚勢を張った。自分でも恥ずかしいくらいに子供っぽい言い訳だと思った。

「チカ、ありがとう」

精一杯の虚勢で突き放して言つたつもりだったが、アリルは笑顔で礼を言つた。

こうなりやヤケだと、チカは心に決めた。断つてもどうせアリルは何だかんだと理由を付けてこの部屋に居座るのだろう。ここは実利を取つて、高楊枝を氣取つてる場合では無いのかも知れないとも思った。

「今日は寝ないでこれから突貫作業よ、覚悟出来るてる

「そういうのは嫌いじゃないわ」

チカは恥ずかしそうに、アリルは嬉しそうにしながらクスクスと笑い合つ。そんな二人の背後に廊下から小さな足音が聞こえてきた。

ドアを開ける動作がやけに手慣れているため、その女性は幽霊のように音もなく部屋に進入してきた。

「ダルグリッシュュさん、何かさっきからドタバタと音が聞こえるけど?」

長身で細身の体から発せられる声はどんな言葉でも命令調に聞こえてくる。規律を厳しく押しつける先生として、学校内では有名な先生だった。

「氣のせいです、サリバン先生」

帚を持つて床を一心不乱に掃いでいるチカを見て、サリバン先生は幾つか質問をしたかった。

机の上有る食べかけのサンドを見て、あなたは食事中に掃除をするのか?

貴方は一人でマグカップを二つ使うの?

それとクローゼットからでているスカートの裾はだらしないと思わないの?

とにかく言いたいことは沢山あったが、足下に転がった小さなメモがサリバンの目に入った。

「コレは？」

「ゴミです」

手に持つた瞬間、チカはそれを素早く奪い取り、「ゴミ箱に捨てた。

チカは自分の瞬間に起こった軽率な行動を後悔したが、サリバンはメモに関してはそれ以上何も言わなかつた。

「ダルグリッシュさん、もう遅いから掃除はほどほどにして就寝しなさい」

「はい、先生」

入つて来た時と同じように静かにドアを閉め、部屋を出て行つた。チカはそつとドアに近づき耳を澄ます。足音が聞こえなくなつてから、十心の中で数えて静かに両開きのクローゼットを開ける。

「危ない」

「危なかつたわ」

同時にチカとアリルは溜息を吐いて、お互いの安全を確認し有つた。

「アリルは部屋に行かなくて大丈夫なの？」

「それは大丈夫、上手く誤魔化すようにルームメイトに頼んだから」

アリルは周りに人望があるので、だれも悪いようにはしない。その

辺はチカと天と地の差がある。

「じゃあ作業始めようか?」

「ええ、まじょう、あつとぬつ間に時間になつてしまつわ

チカは「ミニ箱に捨てたメモを拾い、再び机に向かつた。アリルは帚に向かつてアルゴリズムを記述し始めた。小さな見習い魔女達の工房が、夜静かに動き始めた。

(ダルグリッシュとマローリのコンビか、予想外だったわね)

サリバンは術で足音を演出し、まだチカの部屋の前に居た。それは決定的な証拠を押さえて踏み込むためでなく、ただチカのパートナーが誰なのかが気になつていただけだ。

チカのメモを一瞬で記憶したサリバンは、そのチカの燃焼に対する素晴らしいイメージとセンスに感心していた。

(さすがはダルグリッシュの名を継ぐモノと言つといろか・・・)

サリバンは校長に呼び出された時の事を思い出した。

「「東の魔女」がエウロペに帰つてくる

魔術の歴史を深く学ぶモノには忘れる出来ない名前、ダルグリッシュ家。戦いに敗れ東の果てに流浪したと聞く家の血を受け継ぐものがこの地エウロペに帰ってきたのだ。

それが、その追放の主犯となつたマローリー家の「直系」とコンビを

組んで「世界の夜明け」を目指す。

面白い、サリバンは自然に唇の端が上がった。

「残酷な氷」と証されるサリバンの笑顔は何処か冷笑と言つ言葉以上に見た物の心に痛く突き刺さる。その為、だれも彼女の笑つた顔を見たことがないのだ。見たら石になるとは言わないが、心臓に悪いからだ。

このまま行くと、今年のクラスはヤケに森を越えるのが遅くなると思つたが。どうやら久しぶりのレコード更新も夢では無いようだ。

（これだけ期待しているのだから、小賢しい手を使うのなら容赦しないわ）

サリバンは学校の上空警戒術の再強化でもしようと、管制室へ向かう。足音と表情を消して、サリバンは静かにチカの部屋の前から去つていった。

ファースト・ラップ

広大な敷地の中にある学校の校舎の裏手は柵もなく森に繋がっている。森の中を少し歩くと高台に開けた広場が有つて、昼食時などは沢山の生徒で賑わう。その広場も超えて、更に奥に進むと打たれた杭にロープを繋いだけの簡素なフェンスが有る。

此処が唯一監視の目も緩く、尚かつ誰にも見つからない森に入り込

む秘密のスタート地点だ。

秘密のスタート地点と言つても「帚乗り」をするものは此処からしか森に入れないでの、沢山の人間がギャラリーに訪れたりもする。しかし今日は誰もいなかつた。焦つてゐるのは自分だけかと、チカは誰もいないフェンスの前に一人で帚を持って目の前の森に対峙するように立つていた。

やつと落ちた太陽が森を真つ暗に染めた。田中でさえ針葉樹林の森は薄暗さを感じるのだが、ロープの向こう側は更にその黒さを濃くしていた。

チカはフード付きのコートを羽織つていたので寒さは感じなかつた。だが頬には何やら冷たい風を感じていた。

まだ季節的には早いが、厚手のコートを出して着てきて正解だつた。森の方からは少しずつ冬がしみ出している感じがした。この北欧の地は夏の後に一気に冬が来るといつ、自分が居た四季の変化を感じている余裕は無いらしい。

暗い、何処までも暗いとチカは目の前に広がる「シユバルツバウト（黒い森）」を遠い地平線を見定めるような目つきで眺めていた。黒く先が見えない森を本能で恐怖し、好奇心の狭間を漂いながら、自分の心に有るチャレンジの火が恐怖で消えないよう、好奇心でそれを補つていた。

誰かが土を踏む音にチカは肩を一瞬上げ、近寄ってきた人物の顔を見てその緊張を解いた。

「『めんなさい、遅くなつて』

兜を抱えたアリルが小さな声でチカに呟く。

「別に・・・」

慎重に先生に見つからぬように歩いて来たのをチカは知っていたので、労いの言葉をかけようとしたが何故か出なかつた。チカ自信は気付いていないが、まだ何処かでこの好意を拒もうとする気持ちが有つた。

それに気付く努力をするよりも、アリルが兜のほかにもう一つ、手に持つていたゴーグルの方が気になつた。

「それ？ アリルが言つていたいいものって

「そつ、祖父から貰つた飛行用のゴーグル」

モトレーサー（バイク）用のゴーグルだらうかとチカが見ていると、アリルは手にとつて見てと差し出す。

チカが手に取ると、それは良く工作されたものだと呟つのが解つた。淵の金属部分は暗闇で色は良く分からぬが、手で撫でるとすべらかで、よく磨きこまれてしているのは解つた。

「凄い高価な物じゃないのコレ」

「祖父が昔飛び回つていたときのものだつて、私に譲つてくれたの

さつきからアリルの話に出てくる叔父は余程の道楽者だつたのだろうか？ 少なくともアリルの家が普通の家では無いことは分かつた。

「良いの借りて？」

「是非使って」

チカの疑問にアリルは笑顔で答えた。

「昔祖父が突然突風に有つて森に落ちた時も、そのゴーグルのお陰で目だけは全然怪我しなかったから。縁起が良いものなの」

「他の部分は？」

「右足と左手を骨折して全治三ヶ月だつたらしいわ」

（それでこのゴーグルって縁起良いのかしら？）

大きな疑問を抱きつつも、今更無下に返すわけにも行かず耳の覆いが付いた帽子の上から掛けて見る。

「似合うわチカ」

アリルの小さな手拍子付の賞賛に、チカはどう答えて良いか判らなかつた。

まあ、自動障害物回避アルゴリズムを削つてその回避判断を自分でこなしながら進んで行かなければならないので、目は保護したほうが好ましい。多分アリルもそう思つて懇々自室まで戻つて取つてくれたのだろう。

「サーチング・スペル（索敵呪文）がちゃんと機能するか見てみて

「分ったわ

アリルの指示通りにチカはコマンドを導く。頭で魔術式を組みたてる。

「オペレーター（作動）」

索敵呪文を起動すると、目の前の暗闇から田つぼく木々が浮かび上がる。魔法使いだけが見えるマジックウインドウ（魔法窓）、温度差を感じし術者の視覚に伝えるアルゴリズムが作動し、チカの目の前から暗闇が消える。

「なんか何時もより良く見えるような気がする」

「ゴーグルを掴みながら、チカがアリルの方を向く。

「祖父が何か魔技を施していたのかしら？」

アリルはそう言つ話は聞かなかつたのでチカの感覚を不思議に思った。まあ、一流の魔法技術師である祖父の物なので、何にもギミックが無いのも変だとは思つていた。

「ともかく、これで準備は出来た」

「本当は試し飛びをしたかったけど……」

「一発勝負は嫌いじゃない」

肩に掛けた帚を揺らし、自身溢れる眼差しをアリルに向ける。それが逆にアリルの不安を増幅させた。しかし、どうやらチカという人

物は一度決めたらなかなか止めない頑固者だと言つことは十分理解した。

だから止めない、どんなに無茶をしても壊れないフレームを心血注いで設計したのはその為だ。

「頑張つてね」

「当然」

そう言つとチカは外套のポケットから一枚の札を取り出す。指で挟みながら、呪札に込められた魔法を発動させる。

すると札の先から火が浮かび上がり、灯りが灯る。それを素早く逆の手に持った帚の草の部分に近づけた。

「オペレート（作動）」

帚にコマンドを送ると火はまるで水が染み込むかの如く、帚の草に絡まり始めた。しかし何が燃えている焦げた臭いはしない。これがチカオリジナルのアシスト・マジック（加速用呪文）だ。前方に貼る空気抵抗を和らげるフィールド・マジック（領域制御呪文）から、少しづつ空気を帚の藁の部分に導入し。そこで空気を圧縮してマナと一緒に燃焼させる。それによって得られる噴射圧によつて帚を加速させるという乱暴な仕掛けだが、チカの森を早く切り抜ける為の切り札だ。

そのまま火のついた帚をチカは跨ぎ、両足に力を入れる。頭で飛翔をイメージし、飛翔術をスタートさせる。

この時チカは頭の中には様々な魔術が順を追つて実行されていた。そもそも魔術とは血によつてしか発動しない。いや、厳密に言つてであれば血とセンスによりこの世の物理現象に干渉する。

一般的に血族と呼ばれる一族は平均して魔術を行使出来る体に生まれる。しかし、魔術を発動させる「マナ」の持ち主はその家系に突然現れたり消えたりもする。つまり絵が上手く掛けたり楽器が人より上手く吹けるのと変わらない、個人が持つ「才能」に属するものだ。

魔法学校の入学条件の唯一無二の条件はこの「マナ」が人並み以上に優れていることだ。そして、その「マナ」を有効に無駄なく使う術が「魔術」であり、その「魔術」によつて行われる行為を指して「魔法」と言つ。

(飛翔アルゴリズムを作動させる)

チカは頭で整理された魔術をアルゴリズム(一連の規則の集まり)に従つて実行していく。優れた魔法使いとは、この「マナ」を正確に速く無意識に心の中で広げ実行していく事が出来る人物の事を言う。

チカの意志がマナを伝つてこの現実世界のルールを改変していった。浮かぶはずの無い帚が浮かび、それに乗つたチカも空中に音もなく浮かび始めた。

アリルの頭上を越えたところで上昇を一旦停止して、チカは周囲を見渡した。雑巾を絞るように強く帚の柄を握っていた手を緩め、少し肩の力を抜いた。

「チカ、気を付けて」

アリルはさつきから心配そうな顔を崩さなかつた。チカはそれを上から覗くと、同じ高さで見ていた時とは違ひ何だか細いものにすがつてゐるよう見えた。チカはそれが自分が引き起こしたことだと感じると、急に心細くなつた。

「大丈夫、貴方の設計したフレームは見ての通り頑丈」

軽く柄を叩き、必死に健在をアピールした。

アリルの顔が一瞬綻ぶが、それはまた不安によつて搔き消された。一瞬のうちに消えた笑みに、またチカは心を痛めた。そう、痛める必要が無いはずなのに何故此処まで心が痛むのだろう。

そうだ、痛める必要は全然無い筈だ。自分は誰にも関わつて欲しくない、関わりたくない。この異世界に一人で偏見をはね除けて卒業まで頑張つてみせると決めたのだ。アリルが勝手に心配しているだけだ、私がそれを和らげてあげる義理は無い。

チカは恨むように帚を握りしめながら自問自答を重ねた。アリルの行為を否定しようと躍起になつた。だが、自分が空中に浮いているのは紛れもなくアリルの御陰だった。

色々考えていると、チカは自分でも驚くほどに臆病になつた。目の前に魔法によつて白く浮かぶ風景が不気味に思えてくる。何度か寄宿舎を抜け出して、夜の森を飛行してみたが。今日の前に有る森が、同じ森とは思えなかつた。何か、森に挑まれているような不思議な感覚がチカを襲う。

(迷うな)

そう自分に言い聞かせてチカは兜に前進の指示を出した。その時、チカの心は意志とは反対に迷いが判断を鈍らせていた。前進の指示を中途半端に兜に送ってしまった。

兜の蓑の部分が一瞬赤く燃え上がり、鈍い音が辺りに響く。チカの兜は跳ね上がり、空へ向かつて一直線に飛び上がろうとした。

(しまつた!)

空に飛び上がって森よりも高く飛んでしまうと、「魔法学校」の対空警戒に引っ掛けてしまう。慌ててチカは兜の進路を森へと変えようと、体で兜の進路を変えようと兜にぶら下がるような格好になつて、兜の進行方向を地面に変えた。

「チカ！」

アリルの声と同時に地面にぶつかりそつになつたチカと兜はギリギリで進行方向を垂直から水平へと変換し、森へ飛び込んだ。チカは兜にぶら下がりながらも、その双眸に森の木々を抜ける道を探る。感覚的に左、右と進行方向を指示して高速で森を抜ける。

(凄い、やっぱり加速用のアシストを噴かすとスピードが桁違い)

チカはこの時初めて、暴れ馬の様に言うことの聞かない兜に乗つていることを思い知った。自動回避装置を外した兜はただ術者の指示に従つて飛ぶだけの乗り物だ。それを征すのはチカの意志だけだ。

(面白い、最高だわこの子)

自分が作り上げた「帚」を擬人化すると、急に愛着が湧いてきた。恐れは少しづつ消え、チカは自分の頭が冷静になつてきている事を少しづつ感じられるようになつていった。

(頭に血が上つていたなつて、そつか)

まだ自分がぶら下がつたまま飛行していることに気付いたチカはスピードを落とし、上体を起こし体勢を立て直した。

(マップングと方向指示を準備しなきゃ)

チカは冷静になつた頭で、ナビゲーションの準備をすつ飛ばした事を思い出した。慌てて頭の中で必要なアルゴリズムを呼び出す。

(まずはマップを・・・)

頭の中でマップを呼び出そうとチカは意識をそちらに集中した時、目の前に大きな木が表れた。危ないと心の中で叫ぶ寄りも速く、体を大きく横に倒して滑らすと、外套の裾が木に触れるくらいの距離で間一髪かわした。しかし避けるモーメントと上体を勢いよく振つた勢いが重なり、チカは帚から振り落とされやうになつた。

(停止、進行停止!)

足の中に浮かべて、必死に両手で帚を握りしめてスピードを落とす。鉄棒にぶら下がつたような格好のままチカは空中で停止した。溜息を吐くよつな格好ではないのだが、自然と口からは安堵の溜息が出た。

「大丈夫なのチカ！」

突然アリルの声が聞こえ、驚いて目を開けると声の主が居た。やつとアルゴリズムが働いて出てきたマップはスタート位置を指していた。オートマッピングに至っては丸い円を描いていた。チカはガクツと頭を下げる。

俯いたチカにアリルは声を掛けるのを躊躇つた。チカとアリルが作り上げた「世界の夜明け」を目指す「帚」は荒ぶる神の如く、制御の難しいものになってしまった。まだ自分たちには「世界の夜明け」を目指すのは甘い夢なのか。

その夢だけを一途に目指していたチカに、その事を確認させることは優しいアリルには出来なかつた。帚に力無くぶら下がるチカは一言も発しなかつた。

今日はもう帰りましょうと声を掛けるつもりで寄つたアリルに、チカは突然足を蹴り上げて迎えた。

「きやあ」

突然蹴り上がつた足に驚きアリルは尻餅を付いた。チカは持ち上げた足の反動を使い、長い髪を振り回し、逆上がりの要領で帚の上に昇つた。

「大丈夫アリル？」

帚の上からチカが声を掛ける。アリルが見上げたその顔はとびきりの笑顔だった。何も迷いの無い、自身に満ちた表情。ただそこには

驕りが無く、ただチャレンジすることに喜びを見つけた者の顔だ。

「チカ・・・」

「アリル貴方の作ったフレーム本当に頑丈ね、これなら多分この森と対等に闘える」

両手を組んで、チカは田の前の森を睨み付ける。そして、ナビゲーション用のアルゴリズムを一から組みなおした。失敗はついさつき全部した、それをしなければこの傭ならばきっと夜明け前に湖へ付ける。「世界の夜明けに」立ち会つことが出来る、チカはそんな気がした。

「諦めないの？」

最悪のスタートを切った筈のチカに、腰を地面に付けたままアリルはチカに聞いた。チカは暗闇に再びよりも笑顔を輝かせ宣言した。「アリル私は挑戦するわ、たとえ今日辿り着かなくとも明日には着いてみせる!」

傭を握りなおして、状態を傭に近づける。足首を傭の後ろに掛けて、ピッタリと身体を柄に密着させて眼前の森に挑む準備を全て終えた。ああ、もつチカには迷いが無いのか。アリルは少し寂しくも嬉しかった。

「チカ、幸運をここで祈っているわ」

アリルは懃々東洋の宗教の祈り方に合わせて両手の指を伸ばし、手

のひらを合わせ祈つた。ぎこちない動作に、チカは「ゴーグルを取り地面に座り込むアリルに注意する。

「アリル、まさか待つているなんて言わないでしちゃうね？」

「待つわ」

「無駄よ祈りも含めて」

言い放つたチカを、アリルは微笑んで切り返す。

「貴方は自分勝手に飛んで行くのよ？ 私も勝手に祈るだけ」

勝手にしろと叫びたかったが、自分含めてまさしく勝手にしているわけなので怒りの矛先が自分に向かってくるのを感じたチカは、アリルに文句を言つのを諦めた。

（変なのアリルが教室に居るのは別人みたいに頑固で・・・まるで私みたいだ）

ふと、そんな事を考えていると肩に張った力が抜けた。チカはもう一度全てのアルゴリズムが動いているかどうかチェックした。

（いけない）

頭の上に上げっぱなしになったゴーグルを再び着け直した。視界が開け、再び森の木々が目の前に浮かぶ。今度は恐れない。チカはその決意の目でアリルを一瞥してから、帚を加速させ再び森へと飛び込んでいった。

一瞬の森がざわついたと思つたら、その後森は直ぐ静寂を取り戻した。

真っ直ぐに森へ飛び込んだチカをアリルは手を合わせたまま見送った。そしてさつきまで帚に跨つていたチカの姿を思い出した。ああ、アレが本当のチカ・ダルグリッシュなのだ、教室で何も興味を示さないで表情を変えないチカは全くの偽者だった。

（本当のチカはあんなにも豊かに顔を緩ませる子だったんだ・・・）

自分で気付かない内に、アリルは手を握り締めて何時もの形で祈りを捧げた。無事に帰つてこられればと純粋に祈つた。

祈りと共に、本当の自分を取り戻したチカの挑戦が始まる。

スペシャル・ステージ

氷河が地球全体を覆つていた頃から数千万年たつた現在。この星を覆い尽くす氷の冠は北極点を中心に著しく後退していった。そして、高緯度のこの土地には氷が溶けて残つた豊かな水は深い針葉樹林を作り出した。

森の上には学校の監視の田が張つてあるのでそれ以上高く飛べない、目的地まではこの鬱蒼と繁木々を避けながら進んでいくしかない。そのため早く森を抜けようにも、スピードを上げればそれだけ回避の時間が少くなり衝突の危険が付きまとつ。しかしお明けまでに

残された時間は刻々と消えていく。

(速く、もっと速く)

チカは相棒の帚を握りしめ、双眸を前方に向け細かい指示を帚に送つていた。大小様々な木々を、美しいシユブールを描くように一つ二つと避けていく動きに迷いはなく。少しづつではあるが確実にスピードを上げ、チカは風よりも早く森を抜けを行つた。

この時のチカは、頭の中に高度なアルゴリズムを実装し、その術式に目等の感覚器官から得られた情報を刻々と伝えて完璧に帚を操っていた。冴えた頭にサーチング・スペル（索敵呪文）がもたらした数百メートル先の木々の位置を一瞬で把握し、最適なアクセリングと体重移動を導き出す。帚は森を縫うように木々をすり抜けた。

右に大木を避けそのまま体を帚にぶら下がるように真下に倒す、帚の先を少し押し出し加速用のアフターバナーを噴かす。上昇した帚は横たわる大木を裂け、チカの体は一回りして基のポジションに戻つた。曲芸の用に一つ一つ障害を避けるチカの顔には恐れはなく、ただ目の前の事に意識集中し、細かいコントロールを繰り返していた。アクロバチックな帚の軌道も、その場その場の最適な判断が自動的に行われている結果だつた。

そんなチカの目の前に、山を通小さな小川が目に入った。地図と現在位置を合わせて照会すると、どうやら森の奥深くに通じる川のようだ。助かったと、チカは帚を小川の上へと滑らせて、流れに逆らうようにその川の上を進んだ。川の上にも当然木の障害物が横たわるが、森のど真ん中を突き抜けるよりは警戒しなくて済む。

しばらくは安定して飛行が出来ると思ったチカは、少し頭の中を整

理するためにもスピードを落とし進んだ。

(凄い、鳴と私が一体になつたみたいだ……)

あつと言ひ間に過ぎた時間を振り返つたチカは、軽い興奮から冷静さを取り戻してすこし過去を振り返つた。

アリルと作り上げた鳴は正に森を速く抜けるために作られた道具となつた。細かい進路変更を繰り返要求される場所で、敏感に反応する飛行術式とその急激な運動を支える鳴の耐久性を上げる構造式。この一つが上手く噛み合つている手応えをチカは感じていた。どんな複雑な地形もこの鳴さへ有れば制覇出来る自信が芽生えていた。

手袋越しに伝わる鳴の感触が頼もしい。ただの鳴が自分の「魔法」によつて「空飛ぶ装置」になつたのが嬉しかつた。この装置は自分の指示に従い自由に飛ぶことが出来る。暗く人を拒み続けるこの森を、自分の作り上げた鳴は我が物顔で蹂躪しようとしているのだと。クラスの人間が見たらこの行為をどう思うのだろうかとチカは考えた。尊敬？ それとも自ら危険な森へ猛スピードで飛び込む狂つた愚か者？

(どちらでも良い、この感覚はやみつきになる)

学校では感じられない自由をチカはこの森の中で謳歌していた。自分を学校に閉じこめていた森を、自分が作った鳴で自由に飛び回る。この時チカは何も恐れず居なかつた。井の中の蛙と言つてしまえばそれまでだが、確かにこの森で生きている人間はチカしか居なかつた。そのチカが「自由」を得たと勘違いしても咎めるものは居ない。

自分の実力をクラスの人間に見せ付けるために、「千の泉」に表れる「世界の夜明け」を目に納め、あわよくば梟の羽を手に入れその証拠とすれば誰にも奇異な対象としてではなく魔女としての自分を見せ付けられる。チカにはゴールが近いように感じられた。

それは実際間違いではなかつたが、チカの前に最後の障害がその牙を剥く準備をしていた。

川の流れが急になり、高度が上がつてゐるを感じたチカは再び頭に地図を展開した。そこには自分の現在位置から遠くないところに、危険を訴える記号と共に言葉が記してある。

(竜の巣……)

その名前を見てチカは自分がまだ何も成していない事を思い出した。

そもそも、このレースは通常考えればそう難しいものではない。

距離で考えればたいしたことがない。学校と「千の泉」まで一直線に飛べば一時間くらいで着くだろう。しかし、幾多もの歴史的財産を抱える「魔法学校」を守るために、上空には沢山の監視網が引かれているので、それに引っ掛かると最悪の場合は停学か最悪の場合退学処分だ。

後もう一つは道無き道を走り抜ける方法。森の中を縫うように飛びだ。これはある程度魔術的センスと修練を重ねねば問題なくこなせる。特に魔法学校に入学していくものはその魔術的センスは他の一般の人間に比べて段違いの力を持つ、勉強熱心なもので有れば帰に乗つて森の中を突き抜けるなど対した障害ではない。

しかし、「千の泉」にたどり着けるものは極わずかなのは事実だ。たとえ着いたとしても、早い日の出はとつゝの昔に過ぎているのが常だった。なぜならば千の泉を囲む広大な土地を大木が幾つも折り重なつてできている森、竜の巣が幼い帚の乗り達に超えられぬ壁として存在を露わにしているからだ。

樹齢数千年近い木々が、その巨体を横たえるその森は昔竜が住んでいた地域と言われている。実際、生存痕や化石が横たわり学術的にも興味深い地域である。「魔法学校」とはその竜の研究を目的に作られた研究室が大きくなり、現在の場所に建校されたものだ。

それだけ竜とは、その存在が軀となつても神秘的な対象となつている。

そもそもその筈で竜とはその存在事態が元来否定されるべきものである。何者の攻撃も受け付けない頑丈な体躯を持ちつつも、大空を舞うことの出来る存在。それは自らを魔術によって存在をさせ、己の体を維持していた唯一の生物。人がこの星に生まれる以前に存在していた支配者たる竜の軀から人は魔法の存在をしり、その知恵にてこの星の新たなる支配者としての地位を固めつつ有るのだ。

しかし、その竜の軀が眠るこの森は酷く人を拒む。そもそもこの「千の泉」と「竜の巣」は彼ら竜達の壮絶なる戦いの後とする節がある。彼らの強大な魔法がぶつかり合い、この地にその自然に対しても無敵であるはずの肉体を、哀れに骨とかして埋もれさせているのだ。

その時の戦いの激しさが、この地のマナを未だに荒れたものにしている。マナとは魔法の発動に必要な力であるが、それがこの竜の巣では著しく人のコントロールを拒む、まるで誰か別の強烈な意思が働き暴走する。

(あの話は本当だつたんだ)

チカはまだ踏み入れていない竜の巣の影響を、帚の柄から感じ取っていた。何か、少しでも集中を切らすと途端にコントロールを失うような気がした。なにか、焦りのようなものが空氣に含まれて居て、心臓の鼓動を無闇やたらと早めてくるような気持ちになる。

焦る気持ちと共にチカの帚は進むと、田の前には大木がフィルターのように育苗にも重なっていた。

その巨木のフィルターから絞り出されたように川が流れている。遂に川の源流まで来た、つまり此処から先が「竜の巣」だ。

(なんだろう？頭がチリチリする)

緊張で神経が高ぶるのを感じながら、チカは覚悟を決めて巨木の群れに飛び込んだ。

「アリル、「竜の巣」を飛んだことがあるかい？」

突然背後から声を掛けられて、アリルは振り向く事すらできなかつた。気が付いたら隣に声を掛けた人物は堂々とアリルの横に腰を降ろした。

二人とも学校運営委員会で顔を会わせることがあったので、初対面ではない。

「いえ、ファン先輩」

隣に座る背の高い女性は、ローブを取つて長い髪に手を通した。暗闇でもそのくせつけの髪がランプの光で輝いていた。

「先輩どひじて此処へ？」

「誰かが今日「千の泉」に挑戦しに行つたって聞いたけど、あんたじゃ無かつたのか」

「私にはそんな勇氣あつません」

「やつ、やる気がないだけでしょう。それって何時でも出来るつていう余裕かな？」

「そんな余裕なんてありません」

「マロリー家の次期頭首がそんな謙遜する必要ないだひつ。もつ、立派に飛行術を習得しているんだひつ~」

ファナの声にアリルは少し返答に詰まつてしまつた。ファンの言い方に嫌みはないが、マロリー家の名前を出されると、身構えてしまう癖があるからだ。

「誤解しないでおくれアリル。単純にあなたのセンスの良さを知つているから疑問に思つてるだけだからね」

長い睫毛を付けた黒い目がアリルを覗き込む。

「いえ、判つています先輩」

地中海の陽光をタップリと受けて育つたファナは何処か挑発的で、同姓から見ても危険に見えたものだ。しかし、だれもがその大らかで屈託の無い性格で同級生だけでなく後輩の面倒も良く誰もが慕う。アリルも入学当初から何かと気に掛け

てもらっていた。

「私には時間内に早く森を擦り抜けるレースに挑戦する度胸は無いんです。今日挑戦しているのは私のクラスメイト、チカ・ダルグリッショです」

「へえ、あんたの友達だったんだあの子」

「存じなんですか、ヒアリルは少し驚いた。

「うんまあね、鼎に乗ってる奴はたいがい声を掛けてるようにしてるから」

「気になるんですか?」

「ああ、気になるね」

そう言いつとヒアナは胸に付けた一枚の羽を指さす。

「私より早く「世界の夜明け」に遭遇する人間が出てくるかもと思つてさ」

ヒアナも一年の時に既に「千の泉」で「世界の夜明け」を体験済みだ。この魅力的な先輩を更に花を添えているのはその胸元に付けた

大きなフクロウの羽だった。何時もはフクロウの羽を帚に括り付けて、颯爽と学校を抜け出す姿を見かける。

「先輩は確かに早く」

「いや、丁度入学してから一ヶ月半さ。何か噂には尾ヒレが付いて三週間だと書いてあつたりするけど、そんな分けないだろ?」

それでも一ヶ月半前まで帚で空を飛んだことのない人間が森を突き抜けるなんて、普通の人間が出来ることではない。

「それでも素晴らしい記録ですよね、だからみんなその羽を見て尊敬する」

アリルの目に移るフクロウの羽は白地に銀色の複雑な模様を描いていた。見る角度を変えるとその模様は様々な色合いに変化していく。誰もが目を止め見入ってしまう不思議な模様は貴重さを物語っている。

賢くて人の前に滅多に姿を現さない森の賢者「銀フクロウ」の羽だ。

「見せびらかす訳ではないけど、やつぱりこの羽は私の誇りだから

ファナは手に持つて手元のランプに羽を翳した。

「この羽を手に入れたい為にがんばった訳じゃないけど、やつぱり見ているとあの「世界の夜明け」を見た時の感動を思い出す

横に座るこの物静かな人があの明朗闊達なファナ先輩とはアリルは一瞬混乱した。フクロウの羽を見ているファナはどこか郷愁を思い

出した老人のよろこびにも見えた。

「もう一度あの感動を味わえないのだろうけど、この羽が手元にある限り私は昨日の事のように思い出してしまつ」

初めて見た「世界の夜明け」の事を思い出すと、ファナは急に少女の様に人懐こい笑顔を浮かべた。

「だから何時もの自分らしくない姿を他人に見られたくないから、私は帚にこれを括りつけているのや」

キリッと顔をもとに戻して、再びアリルの方を向いた。

「その帚で「竜の巣」を飛び越えたという事ですか？」

「いや、一人で奉仕活動してる時くらい物思いに耽つてもいいだらう?」

目を細くして笑フアナの顔を見ながらアリルは同性でもドキッとしてしまつた。改めてフアナの人気の根源を知ったような気になつた。

「まあ「竜の巣」を超えたっていうのは何か魔法使いとしての自信に繋がるけどね」

「「竜の巣」そんなに恐ろしい所なんですか?」

「外見は確かに巨木がなぎ倒されて、人を拒んでるように見えるけど。昼間や普通に歩く限り、私達の学校を取り込んでいるこの深い森と何ら変わらないや」

軽く言った後、ファナは遠くにある「竜の巣」を睨みつける様に侮蔑の表情を浮かべた。

「ただ魔法を……魔術行使するものは酷く拒否反応を起こす。特に夜は眠る竜の魂が活性化しているみたいだ」

「そんな！」

今まで腰を沈めていたアリルは急に立ち上がり、大きな声を上げた。

「竜の巣は「アンチ・マジック・フィールド」と言う事なんですか？」

「いや、それは厳密には間違い。実際学校もあそこが「アンチ・マジック・フィールド」と認定していない。実際昼間はなんともない空間だから」

たしかに「アンチ・マジック・フィールド」なら、地図にその種の記号が付け加えられているべきだ。しかし、どんな地図にも「危険で険しい地域」としか書いてない。

「ただ、あの森に強い意思で魔術を使ふると何かが囁いて来るのや」

侮蔑の後は挑発的な笑みだった。

「個としての意識があるわけなく、ただ争いに明け暮れた竜達の思念がノイズとして入り込んでくる」

「ジラゴン・ロアが生きている土地なんですか「竜の巣」は？」

「学校側でも結論は出でないが、たぶんそりだらうな」

竜が己の姿を変え世界に干渉し続けた技を竜言リョウゴンと言つ。この星で行けないとこをなくした人間にすら、その存在は現在をもつてしても確認されていらない。

ただ、竜という存在を世界に許すほどの強力な魔術である事は確かだ。

「なぜそんな所が野ざらしで放置されているんですあか？何かのソサエティーが管理していてもおかしくないのに・・・・」

そう言つてアリルは自分が所属している学校を思い出した。

「やつだ、「竜の巣」は学校が管理して居る「遺産」の一つか」

「ではなぜ立ち入り禁止区域にしないのですか？」

「意味がない」

「ない？」

「「竜の巣」の「遺産」が働くのはその森を飛んでり抜けようとすると者だけに働くからだ。不思議に上空で魔術を使つても何にも反応しないのさ。だから禁止区域にする必要がない、それどころか学校にとつては良い壁になる」

「壁？」

「そう壁、北から魔術を使い森を這つて来る侵入者を確実に惑わす」とが出来る

「それだけの理由で内緒にしてあるんですか？」

アリルにはちよつと話が飛躍しそぎていて聞こえた。

「いや、多分違うね。あれは超えられない壁と同時に試練の壁でもあるのや」

「試練ですか？」

「やつ、複雑怪奇な森を限られた材料で走り抜けるにはそれなりの技量が求められる。その求められる技量とは多分この学校で学ぶ事とそんなに変わらないんだろうな」

アリルはそれでやつとの学校の伝統事業になつている「鳴乘り」について理解した。

「学校は暗に挑戦しろと言つてゐつて事ですか？」

「少なくとも作為的なものは感じるのと、まあ学校に入つて寄宿舎の生活に慣れないと鬱屈したものが溜まるしな。「鳴乗り」はそういう物の解消にはなるし。学校もその辺の事があるから見逃していいんじゃないかな？」

「寄宿舎生活に慣れなかつたんですか、ファナ先輩は

「まあ慣れないというか、周りから浮いていたのは確かさ」

アリルには社交的なファナが寄宿舎生活に慣れなかつたと言つのが不思議だつた。

「なあアリル、あんたは自分が他人と違つと孤独に襲われた事は有る?」

不躾なファナの質問にアリルは少し戸惑つた。

「いえ特に」

小さなアリルの声を聞いて、ファナは少し目を細めた。特殊な家に生まれたものなら一度は必ず抱く心境を、特にという言葉で誤魔化したアリルをファナは少しの尊敬と哀れみを感じた。

マロリー家といふエウロパの魔法使いの一大宗家の唯一の跡継ぎとして生まれた者が、孤独を感じないはずが無い。早くからそういう感情に心を浸してきた彼女は、自然と孤独を隠していくことが出来る。そして、孤独を知つてゐるが故に他人に優しく出来る。

「あたしはね、この世界中から人が集まる学校でそう言つた感情に引きずり込まれそつになつた」

ファナが自分の弱みを見せたので、アリルは驚いた。この力強く凛々しさを寸分も失わない先輩にも弱さがあつた事に、当たり前だが気づかされた。

「そんな時、何か目標があつて知力と体力を極限まで単純に要求される「兜乗り」にはすごく救われた。ハマツタ人間はとにかく他の事が手に付かなくなるんだ。小さな兜に何処まで自分の命を預けられるかつていう、はたからみたら酷く危ない事も平氣で出来るよう

になる」

今度は子供のよつこニアナは田を細めて屈託無く笑った。

「だから、どうにもあのチカつて言つ子が気になつてね。それでたきつけたらアレだ。あたしがやつてた事も無謀と呼ばれただ、あの子のやつてることは異常だね」

「ちよつと待つてください！」

アリルはやつとニアナがこの場に訪れた理由を知つた。そして、初めて先輩相手に感情を爆発させた。

「チカが「帰乗り」にハマッたきつかけはニアナ先輩の仕業だったんですか？」

「ああ多分ね」

仕業とは随分悪巧みをしたみたいに聞こえるとニアナは思った。しかし、鈍い後輩の動きを見てちょつかいを出したくなつたのも事実だつたのでそこは伏せておいた。

「先輩が吹き込んだお陰でチカは体中を傷をつけ、益々クラスから離れていつています」

「スピードは人の視界を狭くする」

チカの身なりがドンドンとボロボロになつていいくのを見ながらニアナはよくほくそ笑んだものだ。

「良い」とや、一旦極限まで視界を狭くして何かに没頭することはない。そうすれば逆に視界が広がった時にぼやけていたピントが合う時があることをファナは知っていた。

「それじゃチカの学校生活はますますつまらなくなってしまいます」

真面目なアリルはファナに食い下がった。

「言い切れるのかい？」

「私はもつとチカの事を知りたいし、私の事を知つてもらいたいです」

恥ずかしげも無くクラスメイトを気遣う理由に、ファナはアリルがチカに抱く感情に微妙な歪みを感じた。

「随分こだわるね？」

ファナは立ち上がってアリルと田線を合わせる。眼鏡のレンズ越しのアリルの目は大きく、光を失つてなかつた。

「チカは遠い異国から來たんです、生活・文化全然違うこのエウロパの地に親の命令で来たくないこの学校に入つたんです」

「だから可哀そう、助けてあげる？」

「確かに私の傲慢かもしません。チカにもそう言われました」

ファナの挑発にアリルは首を振つた。

「それでも私はチカにチャレンジして欲しいんだと思います」

「チャレンジ?」

「この学校は来ようと思ってこれる場所じゃない、私の友人にも来たくても入学を拒否された人間はたくさん居ます」

幼年期から魔術の家計に育ち、脱落して言つた親戚や友人を見てきたアリルにはそれは痛いほど見て来た現実だ。

「チカは幸か不幸かこの場所に入ることが出来た、選ばれた人間なんて傲慢な事は言いたくないんですけどチャンスには違いが無いと思います。だからせつかくのチャンスを放棄しないで、楽しいものに変えていつて欲しいと思うんです」

アリルがチカにこだわるのはその点であつた。豊かな才能に惹かれ、それをチカが放棄しようとする事が眞面目な彼女には許せない。

「チカ本人にはそのチャレンジが苦痛だつたとしても?」

「私にはチカ・ダルグリッシュがそんな痛みに負けるような弱い人間には見えません。だから・・・・・」

ここまで喋つてアリルはファナに向かつて自分の本音を暴露しているのが怖くなつてきた。自分がやつてる事が正しいかどうか不安に襲われた。ファナの目は火の如く、水のように普段冷静なアリルの心を煮え立たせた。

アリルはふと叔父に希に魔眼と呼ばれる目を持つ人間が居ると聞い

たことがあった、ファナはその持ち主なのだろうかと考えると、やけに暗闇にファナの瞳が映えるのに気付いた。

アリルは頭の中で魔眼の影響力を防ぐための術式を必死に探し始めた。

「はは、私の心配は無駄だつたね」

大笑いしながら何度もファナはアリルの肩を叩いた、思わずアリルは咳き込んでしまった。

「あつごめん」

咳き込むアリルを申し訳なさそうに見ながらファナはファナでこの小さな少女を見直していた。

（ただの育ちの良いだけのお嬢さんの箸がない気がしてたが、見た目以上に気が強いヤツだな）

まだ知り合ってからそんなに日が経っていないクラスメイトを、そこまで心から心配できることに感心していた。

「なんか自分を見るみたいで少し気になつて声を掛けてみたんだけどなあ。あんたみたいな確り者が近くに居るんだつたらきっとあのチカつて子は無事に帰つてくるし、これからも問題なくやつてくれるな」

「アナ先輩……」

咄嗟にアリルは魔眼を防ぐスクリーンの術式実行指示を取りやめた。

言葉を聽けば、この先輩が敵意を持つて魔眼を使用してゐるわけではないと悟つたからだ。氣を取り直してアリルはアナに視線を向ける。

「あっ、またやつやつた

アナが一瞬考えた顔をから、頭を搔き鳩巣ながら声を上げた。

「どうしてこう氣付かない?」使っちゃうんだからつ……

「先輩?」

「アリル、あんたもしかして氣付いていた

「いえ、さつきやつと氣付きました」

臉を軽く抑えながら、アナはアリルに謝った。

「別に悪気があつてアンタの心を搔き乱した訳じゃないんだ、ゴメン、どうも天然の物で制御が効かなくて」

「それは分かりましたから、氣になさらないで下をこ」

今迄アナが魔眼の持ち主だということを聞いたことは無かつた、多分みな美しい外観から惑わされていると思つてゐるのだろう。

「どうも私はね、才能があるヤツの前に立つと無意識にコイツを使つてしまつみたいなんだ」

頬の前に指を立てながらアナは反省をしながらつづけ一ヶ月程前の

事を考えていた。

「チカと言ひアンタといひ、見ると疼くのよコイツがね」
その双眸に、再び火が入ったような気がアリルにはしたが不思議と
恐れは感じなかつた。正しい人間が持つマジックアイテムは恐れる
ものではないということをアリルは理解していたからだ。

「生まれてからずっとその目なんですか？」

「ああ、近くに住んでた魔法使いに封はして貰つてたんだけど。学校に入つてからは無意識に使つてしまつみたいで。それもきっとアント達みたいに面白いヤツがいっぱいいるからなんだろうけど」

その話を聞いてアリルは笑いながら思わずため息を付いてしまつた。
自分の事を棚に上げてよく言つと。

「いやあまあ、アンタが居れば大丈夫だと思つから。私眠んで帰る
は

照れ隠しなのか、フアナは帰る算段をした。

「先輩、チカは本当に大丈夫でしょうか？」

フアナが一瞬の間を置いてからアリルを指差す。

「さつき言つたよ、アンタが居るから大丈夫だと」

そう言つとコートのポケットに両腕を突つ込み。まるで男のよつこ
颯爽と校舎の方へと戻つて行つた。

ファナは歩きながら笑っていた、その笑顔を異性から見れば酷く誘惑に駆られる笑みだった。

(アイツの才能をいち早く見抜いて見守る友人が居るのであれば、きっと竜の巣を超えることが出来るだろ(づ)

自分には居なかつたパートナーを早速持つているチカが、少しファナは羨ましかつた。それを幸運と呼ぶのか才能と呼ぶかわ別にしても、面白事には違いなかつた。

「何とかなるか」

事の騒動の発起人は咳きながら宿舎に帰つていった。

残されたアリルは少し安心した後、また訳の分からぬ不安に再び襲われた。ファナ先輩が何を本当はしたかったのかは分からぬが、チカを心配してくれていることは確かだつた。

アリルは再び森を見つめる、時間からしてチカはいよいよ「竜の巣」で戦つてゐることだらう。

再び腰を下ろし、目を瞑つて今日の事を思い返していたら不思議とアリルも笑みがこぼれた。

コントロールできない魔眼の持ち主と、異国から来た頑固者が始めたレースに付き合つてゐる自分も変わり者だということが解つて面白かつた。

幾重にも重なり、その上を「ケや小さな木々に覆われた巨木の群れがチカの田に入つてくる。太い幹をどうすればこんなに根元から折ることが出来るのかと思つほど、ザックリと割れた木が横たわる姿を見てはこの森の名を思い出す。

横たわる円柱の巨木が竜の太い首を、幹が裂かれた部分は、ささくのが鋭い歯を連想させ、竜にの大好きな口を連想させる。初めて入った森は正に故郷の森とは異質で、人を完全に阻む深い森であった。

チカは歴史の授業を思い出した。

「黒い森」は人外の地。

巨木と起伏にとんだ地形は人を欺き、一度と元の世界には戻れない。

「黒い森」は妖精達の世界。

そこは我々以外の者たちが住む世界、当然我々の常識は通用しない。

その「黒い森」が国土の殆どを支配するのがこの「フェアリーラント」だ。

中でも北部に位置するこの「竜の巣」と呼ばれる広大な森は、黒にいくら黒を足しても黒にしかならないはずだが、見慣れた「黒い森」をさらに深遠へと誘うかの如く光届かぬ暗黒の世界を作り出していた。

魔法使いが作り出す「ライトマジック」や、発電機や電池からなるライトを発明するまでの人間にはまさに光届かぬ暗黒の世界として

語り継がれていた。

しかし、近年魔術と科学の発達によりその全貌が少しづつ見えてくると、人々は森の異様な生き立ちを知る事になった。

冒険家にして「魔法学校」の創設者である、ジム・マロリーがこの深い森で半年にも及ぶ現地調査と持ち帰ったサンプルから導き出した結果は世界中の魔法使いを驚かす物になつた。

「この森は竜たちが争いあつた事から生まれた土地だ」

ジム・マロリーの発表は様々なる物議を呼んだが、数十年たつた今では概ね彼の所説が認められている。その後の追跡調査で数々の竜の軀が発見・発掘され「魔法学校」にて研究されている。その研究結果から考察すると、相当激しい戦いが繰り広げられたのは間違いない様だ。この「竜の巣」と呼ばれる地域が異様に起伏に飛んでいるのは、竜が行使した力による物だというのが確認されている。

チカはこの森を抜けアドバイスを一つだけ受けていた。

「竜の巣へ飛び込むときは最初で最後だと思いま。『世界の夜明け』を誰よりも早く見るコツは一発勝負に賭けることさ」

背の高いやけに美人な先輩からのアドバイスだつた。その先輩のアドバイスに素直に従つた事が自分も不思議でしょうがなかつたが、そうさせるだけの説得力が先輩の言葉にはあるような気がした。

実際は魔眼の力で魅了されていた為ながら、本人は知らない。しかし、それが後にチカの心を守ることになる。

(確かに複雑な地形だけど)

チカは突然現れたクレパスに傭を進め、幅数メートルの壁の間をすり抜けた。

(「ここまで来れる人間が超えられないほどのものじゃない）

クレパスを抜け、森の木々を「ゴーグル越しに捕らえると、チカの魔術は一瞬にしてその通り抜けられる最短のルートを導き出した。

(クリティカル！)

空間上有る一点を線で結んでいけばそこには道が見える。それを一瞬の内に把握して、そこへ傭を滑らせば道なき森の中を突き進むことが出来る。この時のチカは、緊張と興奮、慎重と大胆が絶妙なハーモニーを奏で、傭を操る事に集中していた。

森が深くなりそこに光が届かなくても、チカの心には不安は微塵もなかつた。コートの裾が木々を震めたとしても、衝突の恐怖に襲われるることはなかつた。

最短ルートを見つけ、減速後は直ぐにアシストを吹かして失った加速度を得る。その強弱の効いたライディング（乗り方）は正に天分の才能だつた。

そして、この森にはそのチカの自身に溢れるライディングを見ている者たちが居た。世界を少しづつ変えていく魔法の力を感じて、その仕組みは音もなく動き始めていた。チカが静かな森で巻き起こした風は、古い傷に触れたのだ。

(凄い、トンネルみたいだ)

地面を抉り取つて凹面に形成した道が突如現れた。チカはその底部のほうへ帚を進め、一瞬立ち止まつた。まるで当然のように苔や木々が折り重なつて道を作り上げているが。よく見れば木々は一方の方向へと例外なく傾斜していた。

(これが竜の戦いの傷?)

竜が吐くブレスは全ての物を焼き尽くし、破壊して消し去つたと言われている。チカの目の前にはその証拠である傷跡が横たわつていた。

ふとその力の巨大さに恐怖をすると、自然と帚のスピードが落ちた。ただ圧倒な力の持ち主たちの前に足がすくんだ。

その時、チカの目の前に光が見えた。最初は街の夜空に輝く一等星のようにならぬ光だった。

(何か来る?)

光が急速に大きくなり、全てを薙ぎ倒しながらチカに向かつて突き進む。折れる木々、震える空気、全てを貪欲に呑みこみながら突き進む。

道を真っ直ぐに進む光の波を避けようと思つても、チカは体が動かなかつた。全てが夢の様に唐突に現れ、ただ圧倒されてチカは光の渦に飲み込まれた。

目の前が白くなつたあと、直ぐに視界はもとに戻つた。そこにはつ

い数分前の光が呑みこむ前と同じ風景が広がっていた。

慌ててチカはゴーグルを取つて、裸眼を大気に曝した。風が眼に当ると、それが現実だとわかる。

飲み込まれる瞬間まで目を見開いていたチカにはどうにも信じがたい内容だった。

（今、光に呑みこまれた筈なのに……）

確かに自分はとんでもない衝撃波に身を曝したはずだつた。声を上げる隙すら与えない、強大な破壊の波に襲われた。

しかし、周りに木が焼ける匂いもしない。ただ目の前の映像だけが頭の中で指しかえられた。

（なんでそんな事が？）

自分で出した推論をあり得ないことと決め付けて、チカは今の現象を振り返つた。

とりあえず出した結論はこの場からの撤退だつた、溝から抜け出し木々の間を逃げるように飛ぶ。

しかし、目の前で起こつた非常識な光景は確実にチカから冷静さを奪い取つた。先ほどまでに完璧にこなしていた飛行は為りを潜め、木々に危なつかしく近づいていく。

荒くなる呼吸と共に、視界が狭まつたような気がした。回避のタイミングを間違え巨木にチカは身体をぶつけそうになった。咄嗟に出

た足で擦るよつて呪裏を滑りせ、事無きを得る。

(落ち着け、落ち着け)

チカはそつ言えども焦つていく自分がもどかしかつた、先ほどまで頭の中に整然と配置されていたパラメータが一つ、また一つと自分の頭の中から消えていく。

必死で術式の再構築を試みるが、目の前の古い戦いの記録は益々鮮明になつていった。そして後方からは今まで聞いたことの無い程の音が

背中を叩いた。

体中の細胞を沸騰させるような咆哮と共にチカの頭上を一匹の竜が通過した、闇に溶け込むような黒い鱗に身を包まれた竜たちはゆっくりと大空を進軍した。

チカは思わずその雄大さに目を取られ、進むことをやめた。

骨と文献だけの存在が、今どういう理屈だか分からぬが自分の目の前を飛んでいる。その事実にただ戸惑うだけだった。

いつの間にか少し開けた場所に出た。そこから望む森の遠景は薄つすらと赤く染まっていた。そして、急速にその赤みを濃くしていった。

風景に気を取られていると、自然と壼の高度が下がつていった。チカも体力と氣力が急激に奪い取られているのを感じ、地面に降りることを決めた。

久しぶりに降りた地面に、土の感触を確かめる。その現実的な感触が、チカを少し安心させた。

ゴーグルを取つて腕に引っ掛けで兜を杖のようにしてより抱つた。その姿は何処か戦いつかれた兵士が剣に寄りかかっているように見えた。

顔を上げればまだあの一匹の竜が上空を旋回している。糸で繋がっているように互いの距離を一定に保ち、何かを探すように森の上を飛んでいた。

目を細めながら、何か森の中に探していようつたその姿を見ていると。急に像がぶれた。

そして、目の前には巨木よりも太く、空を支えるために作られたような柱が大地を突き破つて乱立した。

一瞬の躊躇の後、衝撃波を含む閃光と共に火球が尾を引き空へと打ち上げられた。

それらの火球はまるで意思を持っているかのごとく、微妙にカーブの軌道を描き、黒い竜を目指して飛翔する。黒い竜に到達する直前にその火急は破裂し、一瞬夜を昼へと変えた。

「「竜の巣」つてそのままじゃない！」

初めて声を出して森へと叫ぶ。

大地から沸いて出た竜たちは小さなチカの存在に目もくれず、ただ

空へと大きな口を裂けてしまつと思ひへりて広げ、空を威嚇する。

一瞬の爆発に照らされた黒い竜を見たチカは、その目が怒りに満ち、その怒気が自分にも向けられていると感じた。

黒い竜は大きな翼を広げ、反撃の咆哮を上げた。光の筋が一線森へと放たれる。捲れ上がる土と木々には目もくれず、白い竜達も火球を次々と打ち上げる。

急激にエスカレーションした戦いに、チカはただ見とれるだけだった。圧倒的な破壊の光景に、自分の心が空っぽになっていくような気持ちだけが大きくなる。

この現象が果たして今起こつていてる現実の風景なのかどうかと言つことはもうどうでもよくなつた。

まるで誰かが投げた雪球から雪合戦が起こつたように、それはどうとつにチカの目の前で始まり、そして何を持つて終わりと決められて無い戦いは終わりの様子が見えなかつた。

閃光が竜の体を突き破り、火球が竜の翼を燃やした。

生き残つた黒い竜がその巨体を弾丸のように丸め、地上に滑空、いや落下して槌のように巨体を白い竜へと振り下ろした。絶命の咆哮と同時に白い竜は巨体を真ん中から折られて潰れた。潰された竜の翼や骨が黒い竜を包んでいるようにも見えた。

(これは幻だ)

必死でチカは幻であることを自分に言い聞かせた。出なければ竜た

ちにとつて取るに足ら無い存在の自分などは、あつといつ間に消し飛んでいる筈だからだ。

目の前の戦いは、まさに森を一つ消し飛す勢いで進行している。

生き残った黒い竜と白い竜が対峙する。お互の咆哮が森を大地を震えあがらせる。赤々と燈る火が、森や大地の恐怖を現しているようだつた。

竜の前に自然すらも無力感に襲われる、ましてや人など姑息な生き物にしかすぎない。

白い竜が首を水平に構えて火球を放つ、それを恐れずに黒い竜は翼をマントの様に翻し直進する。火球を突き抜け白い竜に肉薄すると、その屈強な前脚を白い竜の首筋に打ちこんだ。

杭よりも太い爪が打ちこまれた個所からは鮮血が吹き荒れ、白い竜をたちまちに赤く染めた。返り血を浴びた黒い竜もまた不気味に光沢をまとつた。

白い竜は苦痛を訴えるよりも早く、その牙を黒い竜に打ちこむとまた鮮血が宙を舞つた。

二体の竜が己の全てを賭して戦う姿にチカはどうじよつもなく見守つていた。

その時、お互いの竜が大きな口を開け、近距離でブレスを打ち合つた。光と熱が空中でぶつかり合つと、それらが放射状に四散し、衝撃は周囲の全てをなぎ倒しチカにも襲いかかつた。

幻だと呆けるように魅了されていたチカに、熱い空気が頬を舐めた。チカは地面から突然空へと引っ張られ、木々の中に放り込まれた。

(そんな……)

吹き飛ばされたダメージよりも、さつきまで幻だと思っていたものが突然本物となつて襲つてきた衝撃にチカは初めて冷静さを失つた。地面の振動がいよいよ絶えられなくなり、チカは慌てて帚に跨つた。全てが揺れているような感覚がチカを襲い、何処へ帚を進めればよいかはもう分らなかつた。

唯一、この世界で不動の存在を示している竜たちはその激しい動きを止めて機会を伺つていた。

その姿から、エスカレーションした闘いが最後の局面を迎えていることがチカにも分つた。

水面の波紋の様に、お互いの前面に様々な光の輪が生まれ、それらが集まつて大きな輪を作り上げていつた。今までとは比べ物にならないほどその輪は大きく広がり、そして光の一点へと収束していつた。

本能で最後のカタストロフィーが始まる事に気付いたチカは、必死に帚を走らせた。しかし、アシストを点火しようとしても、焦ったチカには正確に魔術をコントロールできなかつた。

最後に竜の方へと振り向いたとき、火と光が織り成す巨大な柱が見えた。その後すぐに衝撃波が全てを呑み込む征服者の軍団の様に方々で破壊を繰り広げた。

その光の波に自分がさらわれるのを感じて、チカの意識は急速にその白い世界へと溶けていった。

「すゞいわこの映像」

「竜の巣」と呼ばれる森の上空で、帚に乗った一人の少女は腕を組みながら関心をしていた。

帚の先に梟の羽を付け、分厚いコートを纏つた少女は意味深く唇を歪めた。

「グランドクロスとシンクロ出来る子が居るなんて・・・・さすがはダルグリッシュの血ね」

彼女の名はアンネット・デ・サンクティエンス、高等研究院に所属する「魔女」。

幼い顔立ちに反して、チカやアリルよりもずっと年上だ。面識が無いが、「友達」のファンガ今日竜の森に到達する人間が居ると聞いて掛けつけていたのだ。

「ふふ、今日の対空警戒がやけに厳しいと思つたらこんなビックイベントが有るからなのね」

その厳しい警戒網をあつたり見破つて空に浮かぶアンネットは、直ぐにあの鉄面皮のサリバンを思い出した。あの人ならダルグリッシュ家の事を知つているのだろう。他のものにこの竜の記憶を盗み見み

させない為に。

「けど、こんな歴史的な記録を学校だけで独り占めするなんて勿体無いわ」

アネットもまた謎のままの竜の生態を研究する魔女だった。その為に彼女は危険を犯してまで、この「竜の巣」の上空に漂っていた。

「アナはその魔眼で簡単に竜の記憶を見破つたけど、あの子には強烈なトリガーが合つたって訳ね」

大抵の物は竜が生きている映像を見ただけで、逃げ出してしまうが、強烈な「死」の記憶に打ちのめされ、学校に敗残兵のように帰つて行く。「竜の巣」を無事に抜けられるのはその強い意思を持った者だけなのだ。

「さてさて、あの子はここから復活できるのかしら?」

お母さんが絵本を意地悪に閉じるような声をだした。しかし、アネットはその結果には興味が無いのか高度を上げてその場を静かに立ち去つた。

(あれ、ここは何処だらう?)

田の前に広がる深い森を見ながら少女は自問自答する。

(アリル?)

森の手前で静かに腰を降ろしている少女を見て、思わず声に出だす。

まだ、待っていたんだ。真っ暗になつた森で少女は森を見つめていた。

(待つていてもしょうがないつて行つたのに……)

時間的な感覚がわからないが、たぶん彼女は長いことあそこで待っている。自分が出ていった時と同じ格好でずっと待つてくれている。

その事に感動も怒りも無かくチカはその事実を受け止めていた。なぜあの子はそこまで心配できるのかが分らなかつた。

どうする訳でもなく、ただ空に漂つていうような感覚と共にアリルを見ていると、彼女は立ちあがり振り向きもせず校舎の方へと走つていった。

(まつてアリル!)

頭では叫んでこるのに、口は反応せずただ髪を揺らして走る少女を見送つた。

その時チカは久しぶりに寂しいと言ひ感覚を素直に受け入れた。

最初に飛び込んできたのは星空だつた。呆れるくらい、無秩序に散らかつた光る星干が無防備な目に飛び込んできた。

チカは大の字で寝ていた体の上体を寝起きの様に起こし、周囲を見

渡した。

「あつ」

声と同時に田の前にそびえたつ巨岩に田を奪われた。

「竜だ」

大きな岩にしか見えないが、良く見ると岩の壁面に大きな骨らしいものが見える。苔などの様々な植物が表面を覆っているが、一匹の巨大な生き物が互いに向き合っているのがわかつた。

チカはそれがわづきまで自分が見ていた映像の帰結だと言つ事を直感で理解した。圧倒される大きさとと言ひ、多分あの最後まで全てを投げ打つて戦っていた白と黒の竜だ。

チカの目には何だかその竜が薄つすらと光つてゐるよつて見えた。暗闇に「己の存在を示すよつて」。

どうやって自分がここに来たのか思い出せない。

けどチカは、多分この竜達に呼ばれたような気がした。いや、この「竜の巣」に入つてから様々な「問い合わせ」が満ちているような気がしていた。

頭に直接響くその声は威厳に満ちた声だつた。自分の全てを見透かされているような、正直にならなければいけない気持ちでさせる高みからの声。

チカはただ岩を見上げていた。

先ほどまで圧倒的な存在感を放っていた竜達が、自分の前で静かに眠つてゐることにただ見とれていた。

その時、風が少し頬を撫でるとチカははつとして自分の足元を探した。

直ぐ脇に兜が見つかり、それを持ち上げると今度は頭上のゴーグルを掛け直した。

兜を跨ぎ、飛行術式を一つ一つずつ丁寧に開いていった。

兜に身体の体重が乗つかるのを感じ、アリルは満足そうに微笑んだ。

(やつぱりアリルの作った構造式は丈夫だ)

どう転んだか分らないが、コートは泥で酷く汚れていた。物凄く高いところから落ちたようだが身体には痛みは無く、傷は無さそうだった。軽く兜を左右に振つて、付いている葉を落とす。

なぜだか知らないが身体から突然恐怖が消え去ったのをチカは感じていた。目の前に居る竜に脅え、逃げ回った記憶が蘇つても怖くは無かった。ただ、やるべき事を思へ出せせる。

(そうだ、私は「千の泉」を田指す)

なぜ？

岩が問いを発していよいよ氣がした。

「分らないからとつあえずやれる事をやりたい、寂しい気持ちもう沢山だから」

岩に向かって問い合わせるなんて普段の自分なら絶対恥ずかしくてやらないだろうと思いつながらも、チカは真剣に言葉を発した。

岩はそれ以上何も語りかけてはこなかつた。

その時チカはアナ先輩の言葉を再び思い出す。

「竜の巣へ飛び込むときは最初で最後だと思いな。『世界の夜明け』を誰よりも速く見るコツは一発勝負に賭けることさ」

随分とぶつきらぼつだが、必要最低限のアドバイスだつた訳かとチカは理解した。「竜の巣」がこんな場所と説明されても、この不思議な過去との邂逅を理解出来る訳がない。「竜の巣」を帚に乗つて擦り抜けるのに必要なのは、まさに一発勝負の緊張感の中で發揮されるセンスだ。

もう少し具体的な事を行つてくれた方が良いのだとチカは思った。

しかし、それは仕方の無いことだつた。魔眼を持つアナにはこの地で人が見る映像が竜達の記憶の残滓だと見つ事を簡単に見破つたからだ。アナにとつて見れば、この森も普通より少し険しい程度の森でしかない。

多くの挑戦者がこの竜の記憶に呑みこまれ「千の泉」を諦める。この森に入り込んだ記憶すら奪われるものが後を立たない。ただ、「竜の巣」はこの森に「挑戦」してくるものを呑み込む。この森に焼き付けられた竜の力が闘いの記憶を術者に対して直接送りつける。

木々が焼ける臭い、大地が赤く染まる。肉が焼ける臭い、燃えさかる炎の破裂音。それら森の記憶が術者の魔法に過敏に反応して、人が生まれていない古の時代へ飛ばされた様な体験をさせる。

再び兜で走り始めたチカに、再び闘いの映像が送り込まれる。静かな暗い森と、赤く燃えさかる森の様子が交互にチカの目の前に表れ、チカの憔悴した体に混乱と疲労をもたらす。理性で解っている幻と、体で感じる現実が起こす摩擦にチカは何度も冷静さを失いそうになつた。

(それでも私はこの森を越えなければ行けないんだ)

チカが力を込めて握りしめる兜の感触だけが、変わらず自分を支えている様な気がした。そうだ、今信じられるのはこの森を越えるためを作り上げた自分の兜だけだと決意を心に刻んだ。

ただ周りより自分が優れている事を示したために今、恐ろしい光景の中を兜で飛んでいく。目の前の木が幻であるかも曖昧なこの危険な森を、自分の意思で飛んでいる。

(今此処で魔術を停止して、歩いて帰ればそれで全て終わる)

最初から出でている簡単な結論に背を向けて、チカは必死に幻影の森を駆け抜けた。チカ自身もその困難に自ら飛び込む事にどれくらいの意味があるのか、「兜乗り」をしている最中によくそんな疑問を抱えた。しかし、誰よりも早く「ホールを目指す事が自分自身との闘いだと言つことに、チカはこの「竜の巣」の中で気が付き始めていた。

このヒュロパに地に行きなり連れてこられ、森の中の学校にたたき込まれた時、何時かはこの環境から抜け出そうとばかり考えていた。何かの切つ掛けさえ有れば何時かはある何も不自由のない故郷に帰れるると心の何処かで思っていた。

(けど、それは違うんだ)

チカにはさつき見たアリルの姿が頭に浮かんだ。自分を待ち疲れ、去つてしまつたアリルの事を思い出した。あんなに一生懸命手を差し伸べて貰つておいて、暗い森の中を待つてくれたこの森で最初に心からの言葉を交わしたアリルに見捨てられたと思った。

(結局寂しかつただけなんだ私は)

一匹の竜の前で声に出した感情は、この学校に来て初めて表に出したチカの弱さだった。

(泣いてる)

ぼやける視界が目にたまつた涙を知らせてくれた。ゴーグルをずらして指先で拭うと、不意にバランスが崩れチカと帚は地面にぶつかりそうになつた。

慌てて両腕で帚を支え高さを維持して前方を見据える。涙と一緒に目の前の森は静かな姿を取り戻したかのように見えたが、すぐにまた闘いの残滓が現れ始めた。少し疲れを感じ、帚を空中で停止させる。田の前には小高い山が連なつていた。

自分が見ている地図が正しければ、「竜の巣」の最後の峠だ、あの山を通れば「千の泉」が目の前に表れる。そこまでの最後の行程を

想像すると、チカは何か力を吸い取られた様な気がしてきた。数時間も帚に乗つて飛行を続け、体力とマナは既に空っぽになって居るのを感じた。コートの内ポケットに入れて置いた懐中時計を取り出すと、夜明けまでは一時間を切つていた。

(後少しだから)

チカは自分にそう言い聞かせて、最後の行程を往くことにした。

(今此処で「帚乗り」を止めたら今日手伝ってくれたアリルの苦労も無駄にするんだ)

諦めて誰かに助けてもらうのではなく、チカは自分で闘う事を決めた。

(泣いてる場合じゃない。)」で涙を流したつて誰が見てる訳じゃない

この森では自分は一人だ、古の闘いの記憶の中にタダ一人放り込まれ、自分の意思が試される。この森を誰よりも早く抜けたいのなら、その意思を困難の中に貫き通せと。その意思を実行する術が魔法であると言つことを、チカは感じていた。アリルの事も言葉に出来ないが、今は感謝の言葉をのべたかった。暗い森の中でアリルを一人にさせたことをチカは自戒した。

気が付くと空には無数の竜が舞っていた、皆一途に山の向こうへと進んでいった。その方向にはチカも目指す「千の泉」が在った。

竜の様に大空を飛翔することの出来ないチカはそれを見送る。自分がこの険しい山を越える為には、帚に頼ることしかないことを改め

て確認した。ゴーグルを付け直し、チカは再びスタート地点に立つた気分になった。

チカは兜の柄を強く握ると、あんなにも感じていた疲労が少し和らいだ様な気がした。気のせいかも知れないが、さつきから兜が頼もしいパートナーである気がしてきた。

空飛ぶ竜達に引かれるように、チカはスピードを上げ再び動き始めた。

森は千の泉に近づけば近づくほど、その大地に亀裂を作り、巨木は障害となつてチカの前に立ち塞がつた。時間が刻一刻と減つていく中、チカは最短のルートをその場で選択し、障害物の間を擦り抜け始めた。木々の間に小さなトンネルへ果敢に兜の矛先を向ける。その平均速度は徐々にでは在るが、確実に速さを増していた。

その時、スピードを上げたチカの前に、急に表れた壁のような大岩が行く手を塞いだ。チカは一瞬で空気流制御の魔法を書き換え、大きな抵抗を作り上げてフルブレーキングを掛けた。魚を引っ掛けた竿の様に兜は弓のように反り返つた。一瞬動いていた視界が停止する。停止した瞬間チカは周囲の空気を集め、最大出力でアシストを点火した。

壁に弾かれたように進路を変え、また別の岩の前でチカは同じ様なことを繰り返した。加速と停止をまるでスイッチのような潔さで切り替えて行く。

「あらら、間に合わないと思つたけど。これはもしかして間に合つちやう?」

竜の巣上空をのんびり帰ろうとしたアネットの頭に、凄まじい動きをする物体の連絡が届いた。来てみれば期待の子が、無茶な乗り方で森を蹂躪していた。

「あんな乗り方したら、あつと言ひ間に兜が折れてしまうのに」

チカが通るラインがどんどん直線に近づいていくのを見ながら、アネットはそのチカの荒々しい走りを惚れ惚れと見ていた。

「す」いわあの子、まるで兜が折れることを考えていない。余程自信が在るのねフレームの設計に

望遠映像を頭に呼び出し、アネットは鞭のよう撓む兜を見ながら二タニタと笑った。だがアネットは知らなかつた、チカが信頼しているのは兜ではなく、それを設計した人物だということを。

アネットから見て実にチカのアクセリングとブレーキングはリズミカルで面白い。メリハリの効いた独特的のテンポで、体を縦横に回転させながらも重心を射抜き、真つ直ぐに「千の泉」を目指して兜を進める。

険しい「竜の巣」のコースも今のチカにはあまり関係が無かつた、ただ挑戦することが楽しくて仕方が無いという感じで一つ一つの障害物を果敢に挑戦し、その勝負に勝つていった。

成る程そうかとアネットは納得した。あの子は、ダルグリッシュは竜と合つてそれに怯えず、挑戦することを選んだのだ。それがとても難儀な事だということを、アネットは知っていたので肩を竦めた。

「成る程、その血だけがトリガーでは無かつたのね」

アネットは自分の頭に記憶した映像の数々を思い出しながら苦笑した。

「こんなに騒がしく走り抜けられたら、きっと静かに眠る竜も起き出すわね」

自分で声に出しながら、実に情緒的なことを言つてゐるのを感じて、アネットは遠くに見える数々の湖面を見た。

「さて、「世界の夜明け」は彼女にどう影響をあたえるのかな?」

面白そうだったが流石に監視網の目を騙す術を全力で使いながらの飛行はそろそろ時間切れだった。頭上を飛ぶ魔女は再び兜を翻してその場を去った。

そしてアネットの言葉通りにチカは森を抜けた。それと同時に、「竜の巣」はまたいつもの姿を取り戻した。次の挑戦者が現れるその日までの休眠に付いた。

ラストラン

急に変わった空気の匂いに、チカは咳いた。

「湖だ」

何時の間にか湖の上空を飛んでいた、その湖面に自分の姿が徐々に大きくなるのを見付けて慌てて帚を水平に戻した。

まるで布切れが枝に絡まるように身体をだらしなく帚に横たえながら、盆地になつている泉の上でチカはギリギリまで高度を上げ周囲を見渡した。そこは先ほどまでの世界とは違つ、開けた世界が文字通りに視界に広がつていた。

大きな湖の間に沼と言つていいような小さな湖が数えきれないほどあり、その間にポツン、ポツンと木が生えている小島が有る。無数の水溜りが所狭しと散りばめられていた。

（着いたの千の泉に……）

チカは「千の泉」の由来を思い出した。真面目な誰かが一生懸命泉の数を数えていたが、時刻と気象条件によつて泉は隣とくつ付いたり増えたりするのでついにサジを投げた。そしてめんべくさくなつて「千は有るだろ」で「千の泉」と名前をこの地に付けた。

この話しさ聞いてチカは馬鹿馬鹿しいと思つたが、今自分の前に有る星を身に纏つた湖面を見ていると改めて馬鹿な話だと思つた。

これの数を数えてどうするつもりだつたんだろ？

疲れ切つた身体でチカは頭の悪い誰かの事を考えた。

不自然なくらい湖の上空は静かで、自分以外の生き物の存在を感じなかつた。探そうと思つても、もうそんなに時間が無い。夜明けは刻々と迫つていた。

「世界の夜明け」

そう名づけられた朝日を見たものだけが、銀フクロウの羽を持つてかえることが出来る。

その為の「帚乗り」だった筈だが、チカはどうでもいいような気がしていた。

疲れ切つた身体にこの静寂は有りがたかった。なにか今だったら小さな事は全て許してしまつような気がした。

目の前に広がる世界の広さに圧倒され、チカは心地良い疲労感を味わっていた。そんな時、チカに「世界の夜明け」が訪れた。

最初はとても唐突だった。風が止み世界が沈黙すると、湖の湖面が平面を保ち鏡の様に像を写し始めた。数え切れない程の湖面が鏡の様に、眩い光を放つホシボシを映し出す。

空も地面も輝く星に征服され、木が生えている島は海に漂う魚のように星空に浮かんでいる。

日が昇りきる前の少ない時間、そこは星の間を漂う空間へと変わる。

チカは見渡す限りの星達に圧倒されていた。上を走る天の川が下にも映っている。感覚としてどちらが本物か自信が無くなつた。上下感覚を奪われ、空氣すらまるで薄くなつたようだつた。まるで水に漂うような、いや重力から解き離れたような心地にチカは興奮よりも安堵を覚えた。このままずつとここに浮かんでいたい、何からも自由な自分だけの空間。

ふとチカは手を伸ばした。星を掴めると思つたからだ。自分でも子供っぽいと思つたが

ここにいると届きそうな気がしたからだが、もちろん掴めるわけがない。チカは自分の行動を笑いながら帚に倒れこむようにして空を漂つた。

そう、手が届くような眩い星達も触ることの出来ない遠い所にあるものなのだ。そして、星達からも自分に手は届かない。ただ存在を知らしめる光を送るだけ。

こんなに沢山の星に囲まれても人は孤独で、それをどうすることも出来ない。

必死に林を駆け抜け、辿り着いた場所は無限の広がりを持つて挑戦者を向い入れていた。

もちろんチカはその感動を言葉では思いつかなかつた。ただ一瞬、この世界の本当の姿を見ただけだ。隔たりは無いが無限にも近い距離に漂う自分を感じていた。

(確かにこれは人には感想残せないや)

「世界の夜明け」を見た人間が、言葉少なく「凄い」としか言えないのが良く分かつた。

これが後世の人間ならば宇宙空間に漂う気分だと表現できただろう。しかし、それにはまだもう少し時間が必要だ。

そもそもこの泉はこの星にあるものだけで作られたわけではない。

昔、星の軌跡すらも動かしたと言つドーラ「ノロアの力により、呼び込まれた無数の隕石の落下によるものだ。

その落ちてきた物の宇宙空間を渡つていた時の記憶が、「世界の夜明け」と呼ばれる現象を引き起こしているのか、それもまだまだ解明されない謎だ。

今は「生き竜たちの戦いの傷跡が深く残るこの地にはこのような奇跡が起きる。だが体感するものにはその奇跡の源が何であるかは関係無い。チカもただ浮いているだけなのに、なぜこんなに気持ち良いのかは考えなかつた。

そして、「世界の夜明け」が地平線上に現れた。

眩い光が世界を包み元の姿へと変えて行く。

色がこの世界を形作つていくと、急に空気も匂いを風に乗せて運んできた。

付けていたゴーグルを外し、目が外気に触れると自然に涙がこぼれた。ゴミが入つたからか、気持ちが昂ぶつたかはチカにも分らなかつた。ただ、時間にしてたつた数分の体験の喜びと終わつてしまつた寂しさは良く分かつた。

袖で顔を拭つた後、兜の先に一匹のフクロウが留まつていた。最初つからここにいるように、微動だにせず。その大きな瞳でチカを見つめる。その身体は朝日の光に様々な模様を描き輝いていた。図鑑で見た姿よりもその気高さは際立つていた。古い時代からの知恵の象徴であるフクロウが、チカを踏みじしているようだつた。

(羽根……)

チカは咄嗟に手を伸ばした。銀フクロウは脅えるわけでもなくその手を見つめた。

まったく動かない銀フクロウを見て、これなら羽根の一枚二枚は取れそうだった。

もう少し伸ばせばその銀色に輝く翼に触れるところまでチカは手を伸ばした。そして、その手を引っ込め手のひらを見つめる。強く帯を握っていた手袋はボロボロになっていた。

(私に貰う資格があるかな?)

このフクロウと会つまでの一日を思い出すと、銀フクロウには手を触ることが出来なかつた。昨日まであんなにも欲していたのに、目の前のフクロウに触るのは躊躇つた。

チカの躊躇いを見届けると、フクロウは現れた時と同じように静かに姿を消した。湖面を低く滑空し、何処かへ飛んでいくフクロウをチカは最後まで見送つた。

(帰る(う))

再びゴーグルを掛けなおし、手袋を良く手になじませた。ナビゲード・スペルを再チェックし、帰りの行程を導き出した。

最大推力で吹かしたアシストは、大きなバックファイヤーを起こして静かな湖面に波を起こした。真っ直ぐに、ただ真っ直ぐにチカは突き進んだ。当初の目的を達しないまま、チカは帰路についた。そ

の事に当の本人は何の不満も無かつた。

チカの帰路は順調に進んだ。帰りの「竜の巣」は全く別の顔でチカを向えた。昔の記憶を掘り起こすことも無かつた。拍子抜けするほど簡単に「竜の巣」を通り抜け、他の森も木々の間をゆっくりとすり抜けた。

緊張感から開放され達成感に包まれた後、訪れたのは脱力感だった。

気が付くと転地逆さまにひっくり返り、ぶら下がるように飛んでいた。慌てて体制を立て直しても、再びぶら下がつてしまつ。なんとか傭に絡み付けてい足もやがて力が入らなくなり、時間と共に瞼が重くなつてくる。

やがて、身体中のマナが尽きるのを感じて終に足を地面につけた。木の根元に横たわると、疲れがさらに身体中に溢れたような気がした。かといって野宿する気も無かつたので、ひたすら学校へ向つて歩いた。

傭を担ぎながら大木連なる森を歩く自分の姿を思うと、可笑しくて仕方が無かつた。半分以上やけになつて歩いていると、遂に最初に森に飛びこんだ場所に付いた。

(良く帰ってきたなあ私)

自分で驚きながら、遂にその場にへたり込んだ。もつ少しでベットの距離まで来たが、もう一步も動きたくなかつた。

「お帰りなさい」

その声に驚いてチカが顔を上げると、アリルの手が伸びていた。

「アリル…」

「遅かつたから凄く心配したのよ」

チカは手を伸ばし、アリルの手を握った。手袋越しでも分る手の冷たさに驚きながらも、久しぶりの感覚に安心もした。

アリルは抱き起こしたチカの身体を引き寄せ、抱擁で安全を祝った。

アリルにしては珍しく子供っぽいと思った。彼女の細い身体にこれ以上より掛かるのも悪いと思い手を離す。

「私が出てからずっと待つてたの？」

「竜の巣」で見た事を思い出しながらチカは聞いた。その問いにアリルは首を振って答えた。

「一度コレを取りに戻つたわ」

そういうつて脇に抱え込んでいた保温瓶を出す。

「何ソレ?」

「暖かいお茶。疲れてるだろ?と思つたから、何か暖かいものをと思つて」

そう言うとアリルは手際よくカップにお茶を注いだ。白に薄く茶色を混ぜた液体からは湯気が立ち昇る。差し出されたカップを呆気に取られながら受け取り、チカは口を付けた。

「甘い」

タッブリのミルクと砂糖が入った紅茶は寝不足の体に深く染み込んだ。

「あつごめんなさい、チカは何も入れないほうがよかつたのよね」

何時かの話しひを思い出としてアリルは不手際を詫びた。

「いや、今日はこの方が好い」

嬉しそうにミルクティーを飲むチカを見ながら、アリルはチカに微妙な変化に気付いた。

「「千の泉」まで辿り着いたの？」

アリルは今まで意識的に聞かなかつた話題に触れた。

「うん何とか」

チカは即答したが、アリルから見て、証拠である銀フクロウの羽根は何処にも見当たらなかつた。

「凄いわチカ、一番最初に千の泉に辿り着いた一年生は貴方よ」

それでもアリルは大喜びだつたが、チカは何処か人事の様にカップ

を覗き込む。

「どうしたの？」

「私はズルをした」

まるでカップに語るより、中の液体を回すより揺りしてチカは寂しげに語った。

「一つは先輩に竜の巣への挑戦の仕方を教わったの、あのファンとか言う名前の背の高い先輩に」

「何を教えてもらつてたの？」

「竜の巣へ飛び込むときは最初で最後だと思えつてね。あのアドバイスが無かつたら中途半端な気持ちで飛びこんで、竜の記憶の餌食になる所だった」

チカが語る竜の巣での出来事、竜の記憶を垣間見るという言葉にアリルは少しも疑わなかつた。ファンとの話でその存在は知つていたからだが、チカの話しからもその現象の奇妙さは伝わってきた。

「冷静になつて考えればアレは竜の記憶と言つより、あの森の記憶だつたのかな」

「森の記憶？」

「うん、この世を壊すつもりで戦つた竜たちの戦いが目の前で展開される。その戦いの傷跡が、自分達が森を抜けるコースとして今に残つてゐる。そこを魔法を使って駆け抜けていると何時の間にか

自分の心の中にその傷の記憶が身体に染み込んでくるのかな

アリルにはチカの推論は正しいと思った。遠い昔に滅んだ竜の魔法は現代にまで影響を及ぼしていると言つ話はよく聞く。

「レコードの針の様に記憶の上をなぞつて、竜が生きていた時代の記憶を追体験したの？」

「うん、そうみたい」

「簡単に言つけどチカ、凄い話じやない」

「凄すぎてね、古代史研究家なんかは是非見たかったんだろうけど

夜が明けてもチカは猛々しい竜の姿は忘れられなかつた。

「私はもう引き帰す気持ちなんかこれっぽっちも無かつた、だつて絶対銀フクロウの羽根を付けて帰つてくるつもりだったから。今日で最後にしたかつた」

今考えると何が最後にしたかつたかわからぬが、多分回りに認めてもらいたかつたのだろう。自分が強い人間であると、周りの人間とは違うと。

「たぶん殆どの人はあの「竜の巣」での体験で気味悪がつて一度と兆戦しないんじゃないかな」

「「竜の巣」を超えるのは強い意思だけね」

「なにそれ」

「アナ先輩の言葉よ。チカの事を心配して」「今まで来てくださいたのよ」

「先輩が？」

フーンと言いながら、風でボサボサになつた髪にをかきあげる。

「結局あの先輩に上手く乗せられたんだりうね」

「そうね」

今度は一人でクスクス笑つた。

「もう一つはチカ？」

アリルの何気ない質問に、チカは真剣な面持ちに変えた。

まるで罪を告白するような目に、アリルも少し身を引いた。

「もう一つは……アリルに手伝つてもらつたこの帚」

右手に持つ帚を誇らしくチカは語つた。

「このアリルに作つてもらつた帚があつたから「竜の巣」を潜り抜けることが出来た。「世界の夜明け」つていう、今まで見た中で一番素敵な場所に辿り着けた」

「そんな事ないわ、全て貴方の意思の力」

「違う。私はただのワガママだよ。それは意思なんてカッコイイ物じゃない。アリル、貴方が私のワガママを真剣に聞いてくれて、そして一晩中心配してくれたことを私はやっと分かった」

チカは言葉を選んでも、目はアリルを直視できなかつた。アリルはその話しを静かに聞く。

「それがどんなに難しいことが私は一人で「竜の巣」で齧えていた時、この兜を見て気が付いた。あの時一人じゃないと言つことに凄く救われた。」

チカはこの時自分で涙目になつてゐるのに気付いた。必死にそれを溢すまいと我慢した。けど、我慢を重ねれば重ねるほどそれは水量を増し、やがて頬を伝つた。今日は泣いてばかりだとチカは思つた。意固地な殻が全て剥がれ落ち、素直になる。

「そう結局私は一人では何も出来なかつた、一人じゃ何も出来ない小さいヤツって言つことを確認しに行つただけだつた……」

チカは自分が弱いと認めることがこんなに悔しい事とは想わなかつた。ただ、アリルの前でもう虚勢は張れなかつた。森の中で何度も折れない兜に命を救われたかわからない。この丈夫な兜だから安心して森を駆け抜けることが出来た。

「そう考えたら銀フクロウから羽根を取る事も出来なかつた」

気が付くとチカよりも大粒の涙をアリルは流していた。右手をチカの肩に当て、もう片方の手で涙を拭く。

「アリル？」

「『めんなさい、私はやつぱりチカに辛い』ことをさせたのかな？」

「そんな事無いよ本当に……今更だけどありがとうアリル」

チカは急に恥ずかしくなつて下を向いた。今までアリルに面倒を見てもらつた事を考えると今更ながら照れた。

アリルはアリルで初めてのお礼に照れていた。もう言葉は要らなかつた。「世界の夜明け」がどんな物だつたかもアリルには興味が無かつた。ただ目の前で泣いたり照れたりするチカを見ているのが嬉しかつた。

アリルもチカもやり遂げた達成感で一杯だつた、その証拠が無くても全く負い目を感じなかつた。

「私はやつぱり『兜乗り』に挑戦してよかつたよアリル」

「やう」

「本当に私の知らないことばつかりなんだこの世界は」

チカは兜を肩に担ぎ、戦場から帰つた兵士の様に胸を張つた。

「今度は何に挑戦するの」

技とらしく手を顎を当て、チカは考える振りをする。

「とりあえずは、べつとり甘いジャムのついたトーストとスクランブルエッグとサラダの重い朝食かな？」

「また辛い戦いね」

「うん、けどもう食わずに嫌いはやめよう」と黙った

チカは帰を、アリルは保温瓶を抱きながら宿舎へと歩く。チカはあの柔らかいベットに倒れこむのが先だと思った。今ならあの柔らかさも許せる気がする、いや歓迎する、白いシーツへと飛びこむ覚悟は出来ていた。

「せっせと飯食って、今日はもう寝るよ」

伸びをしながらチカが前を進むと、アリルは慌ててチカの方を振り返る。

「今日はサリバン先生の授業が午前中にはつたよね」

「うそ」

「休校日だけど特別授業があるって昨日連絡が急に……」

「なんでそんな大事なこと今さら言ひのー！」

「えつチカ知つてると思つていたから」

今日の「帰乗り」に夢中で授業なんて上の空のチカがサリバン先生のボソッと言つた連絡など覚えてる筈が無かった。

「今日授業があるつて分かつていたら「帰乗り」なんてしないって。授業中眠くなるに決まってるじゃない」

「『めんなさい、私は何時も睡眠時間短いから……チカもそんなのがなあと思って』

（他人に自分の常識押し付けないで！）

出掛けた言葉を手と同時に引っ込んで、チカはその場に座りこんでしまった。今更そんな事アリルに言える分けないので諦めた。昨日までの自分だったら文句が幾らでも出て来るのに。

座りこむとのまま眠ってしまった。授業をサボって木の根元で寝るというのも気持ち良さそうだとチカは思案したが、サリバン先生の授業をサボった場合と寝た場合どちらが酷い結果を生むのかは明白だった。

寝ただけで、一時間以上クドクドと説教され時間の掛かる特別課題を出と出されるのだから、サボったとばれたらどんな仕打ちをされるのだろうかと考えると疲労感は最高に高まつた。

まさか、前日に自分の部屋に来たのも偶然ではないのかもと考えると、崖淵に立たされたような気分になつた。

「『めんなさいチカ』

サリバン先生の授業で居眠りした生徒の末路をアリルも知っているので、どう声を掛けよいか迷う。その時座りこむチカを上から覗き込むと、ホールのフードの中にこの問題の解決策をアリルは見つけた。

その時、この孤独なレースは完結を迎えた。

エピローグ

誰もが教室に漂う異様な空気を感じながら授業を受けていた。

学校一厳しい先生として知られるサリバン先生の授業なので、緊張感に欠ける事は普段もそんなに無いのだが、今日は緊張感の中に何処か浮付いた雰囲気も含まれている感じがした。

誰もがその目立つ生徒に対してもう一つでも口を挟みたいのだが。この教室の現在の絶対権力者であるサリバン先生がその生徒に対して一瞥した後無視を決め込んだので、全員もそれに従つた。

しかし、多くの者が黒板よりもその生徒、チカ・ダルグリッシュの方を見てしまう。チカの方を見ていると、サリバン先生から質問が飛んでくるので慌てて授業に戻るが、また居眠りするチカについて目をやってしまう。

そんな光景を廊下の窓からチラチラと覗く人間がいる、休日返上の特別事業なので他の生徒は休みなのだ。口コミで何人かが覗きに来た。奇妙な光景に訪れた人間は一様に引きつった口元を隠し去っていく。それ意外では背の高い先輩が大声出して笑って帰つていった時には、さすがに全員が廊下の方を向いたが先生だけはそれも無視した。

事態の共犯者は別にチカの方を向くわけで無く、ただ熱心にノート

を取っていた。その端に、新しいお菓子のレシピが落書きされたのは本人しか知らない。

共犯者はその明晰な頭脳をフル回転させ、今日の授業の内容を理解しつつ今度チカに食べさせる故郷のお菓子を思案した。クリームをタップリ付けたスコーンを甘すぎると文句言いながら食べる姿を想像しながら受ける授業は楽しかった。

チラッとチカの方を見ると、騒動の発端は光が波打つて煌く。銀フクロウの羽根がピンとチカの黒い髪に挟まり、旗の様に振舞い教室に存在を誇示していた。

サリバンがチカの脇を通るたびには教室は緊張に包まれる、サリバンが羽根を一警するとチカが寝返りを打つてサリバンの方を向いた。教室の緊張が沸点まで高まり、誰もが爆発と秩序の崩壊を予想したとき、それを覆す事態が起きた。

ほんの一瞬だがあの鉄面皮のサリバン先生が笑つた。呆れと、どこか赤ん坊を愛する母親のような笑顔でチカを見届けてそのまま机の間を進んだ。

教室の誰もが「奇跡」を見たような顔になつて、挑戦者の方を向いた。満足そうに眠るチカを誰もが認めた。

自分の授業が久しぶりにざわついた雰囲気になるのを感じながら、サリバンは自問自答を繰り返していた。

(あんな幼い顔で寝る子に、本当に魔女になる為の「正しい素質」^{ライタースタッフ}が有るのだろうか?)

森の賢者たる銀フクロウに魔女たる素質を認められた証に送られる羽根を付けた少女を見ながら、サリバンは久しぶりの逸材を前に笑みがこぼれた事を自覚していた。

そして、時間きつかりの授業を終えてサリバンが教室を後にした瞬間、教室から爆発的な歓声が廊下まで聞こえた。

その歓声を聞きながらサリバンは久しぶりに自分の机の引き出しに入っている銀フクロウの羽根の事を思い出した。その羽根を手に入れたとき、何かから一步前に進んだと感じたあの頃を思い出した。飛びふことの意味を少しだけ自覚し始めたあの日の事を。

何時の時代も飛び事の素晴らしさは変わらない、それは永遠に受け継がれるものなのだろう。

サリバンは自分の歩幅が嬉しさから大きくなるのを感じ、チカ・ダルグリッシュへの懲罰課題の内容を考えながら教員室へと向った。

こうして「帰乗」は永遠と続く。

(後書き)

あとがき

最近お気に入りの言葉

「思いついたプレーの中でも、何時も一番難しいのを選択している」

サッカー選手 元イタリア代表 ロベルト・バッジョ

前の本を買っていただいた方、「ご無沙汰しております。

初めての方、読んでいただいてありがとうございます。作者のことを
だと申します。

今回の話は前の話の舞台がちょっと現代だったので、反動でいつ
ちよファンタジーを書きたかったという所から書き始めました。

前作で魔女の定義みたいなのが曖昧かなみみたいな指摘をもらつて、
自分で魔女の定義を考えてた時にまず最初に思いついたのが「
帚に跨った魔女」でした。

それでちようどWRC（世界ラリー選手権）でペター・ソルベルグ
の氣合の入ったレースっぷり、冷静の中に情熱が溢れる走りに感動
していたので「帚のレースなんてどうよ?」と田論んで書いてみま
した。

後は昨今のファンタジーブームに跨ればそれなりに読まれるかなあ

と「風が吹けば桶屋が儲かる」理論を展開して相変わらず夢に溺れた書き方をしました。

けどファンタジーって自分で歴史を作る作業なのでそれは凄く楽しかったですね。その分ちょっと独りよがりで纏まってないのは、まだ僕の中での話が完結してない事もあって、書き足りないと感じた部分も正直あります。次回作にこの経験が生かせるかどうか、馱目っぽい気がするなあ。是非感想など送つて頂けると、次回その辺が改善されると思うのでよろしくお願ひします。

あつタイトルは好きなサッカー番組から取らせて頂きました。分かることには分かると思います。知らない人には意味が分からぬですね。

いつもの様に校正に色々な方に見ていただいて、ご苦労を掛けました。また掛けるんでしょうか（まだ、まだ終わらんよ）。

それでは次回なにかでお会いできればと思います。

では

さわだ

11/29/2003

という後書きを書いたのが四年近くも前の話で、何となくこりがて投稿してみることにしました。

もとはミニトライアで発表した作品です、今も毎回参加させていただ

いてあります。

http://www010.uup.sonet.ne.jp
/foot/

楽しんでいただければ幸いです。

ではでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3320d/>

帰乗りは終らない

2010年10月12日05時54分発行